

# 假名手本忠臣藏

## ○大序鶴が岡の段

嘉肴有りといへども食せざれば其味を去らずとは、國治つてよき武士の忠も武勇もかくる、に、たとへば星の晝見へず夜は亂れて顯ゆる、例を爰に假名書の「太平の代の政、頃ハ曆應元年二月下旬、足利將軍尊氏公新田義貞を討亡し、京都に御所を構、徳風四方に普く、万民草のごとくにて靡、從ふ御威勢國に羽をのす鶴が岡八幡宮御造營成就し、御代參として御舍弟足利左兵衛督直義公、鎌倉に下着なりければ、在鎌倉の執事高武藏守師直、御膝元に見下す權柄眼、御馳走の役人ハ、桃井播磨守が弟若狭助安近伯州の城主鹽治判官高定、馬場先きに幕打廻し威儀を正して相詰る、直義仰出さる、いかに師直此唐櫃に入れ置しハ、兄尊

氏に亡はろされし新田義貞にいだぎさだ、後醍醐ごたいごの天皇々給たまはつて着ちやくせし兜敵かぶとながらも義  
 貞は清和源氏せいわげんの嫡流ちやくりゅう、着捨ちやくすての兜かぶとといひながら、其儘そのまにも打置うちおかれず當社どうしゃ  
 の御藏ございに納たくる條、其心得こころえ有あべしとの嚴命げんめいなりと宣のたまへば、武藏守承ぶさむねり、是この  
 思おもひも寄よざる御事ごじ、新田が清和の末すえなり迎むかへせし、兜かぶとを尊敬そんけいせば、御旗ごはた下した  
 の大小おほい、清和源氏せいわげんのいいくらも有あ奉納ほうのうの儀ぎ然しかるべからず、候まうと遠慮えんりよなく  
 言上ごんじやうす、左様さやうにては候まうまじ、此若狹こゝろが助存すけぞんるは、是こゝは全く尊氏公そんじこうの御計ごけい  
 略りやく新田にいだに徒黨とどの討渡うちわたりされ、御仁徳ごにとくを感心かんしんし、攻せめずして降参かうさんさする御方便ごべんぽう  
 と存奉ぞんほうれば、無用むようとの御評議ごひやうぎ、卒爾そつじなりと、いはせも果はず調、師直しりちにむかつ  
 て卒爾そつじとは出過いでぎたり、義貞ぎさだ討うちち死しえたる時は、大おほわらは、死骸しがいの傍そばに落おち  
 散ちたる兜かぶとの數かずは四十七しじゅうしち、それがどふ共見ともみしらぬ、兜かぶと、どふで有あふと思おもふの  
 を、奉納ほうのうした其跡そのあとで、そふでなければ、大きな耻はぢなま若輩じゃくはいな形かたちをして、恥尋ちじん  
 もなき評議ひやうぎ、すつこんで恥居ちいやれと御前ごぜんより儘出まる儘まに抗かむ共思ともみはぬ、詞ことば

の大樾オホノキ打込うちこれてせき立色目せきたちしきめ搥治ウチヂ引取ひきとて、御尤ミコト成る御評議ミコトノヒらひながら、桃井ももい殿とのの申まをさる、も納たくまる代よの軍法ぐんぽう、是こゝ以もつて捨すられず双方さうほう全ぜんき直義ちかよ公こうの、御賢ミコトノサとし慮り仰おほ奉まをると申まを上あれば御機ミケ録ろく有あり、左ひだりいわんと思おもひし故ゆゑ、所存しよぜん有ありて鹽治しよぢが婦妻よさいを召連よめをよれよと云い付けし、是こゝへ招まねけと有ありければ、いつと答こたへの程ほどもなく馬場ばばの白砂しろすな素足すそあしにて裾すそで庭掃にははきうちかけ襦はは神かみの御前ミコトノサかしこの玉たまはばき玉たまも欺あやむく薄化うすけ粧しやうぜんや鹽治しよぢが妻つまのかはよ御前ミコトノサかしこ、遙はるかさがつて畏かしこる女おんな好きすきの師直しよぢ其儘そのまま聲こゑかけ鹽治しよぢ殿とのの内室うちむろかほよ殿最前ミコトノサかしこ、嘸待まを遠御太義とほミコトノサかしこ、御前ミコトノサかしこのれ召よめをよし近ちかふと取持とち顔かほ、直義ちかよ御ミコトらんじ召よめをよし出す事外いんしげんかうならず、往元弘むかひげんかうの亂みだれに、後醍醐ごたいご帝てい都みやこにて召よめをよされし兜かぶとを、義貞よしかたに給たまはつたれば最期さいごの時に着きつらん事疑ことひななけれ共とも、其兜かぶとを誰有たれありて見みしる人外ひとがになし、其頃そのときハ搥治ウチヂが妻つま、十二じふにの内侍うちわらひの其内そのうちにて、兵庫司ひやうぐさしの女官おんなのつかさどなりと聞き及およぶ、嘸見まを知りあらんず、覺おぼ之のあらば兜かぶとの本阿彌ほんあみ目利めき、と女おんなこには嚴命げんめいさへも和やはらかに承うけ受け申まをも又

なよやか、冥めい加かに餘る君の仰、夫れこそは私が、明け暮手馴し御着おちやくの兜、義  
 貞殿拜領はいちやうにて、蘭奢待らんしゃたいといふ名香を添そへて給たまへる、御取次ごとりつぎきは則ちかほよ、  
 其時の勅答ちよくたうには、人ハ一代名は末代、すハ討死せん時、此蘭奢待らんしゃたいを思ふ儘、  
 内兜うちぶたに炷たきしめ着るならば、鬢びんの髪かみに香かを留とどめて、名香なかう薫る首取くびとりしといふ者  
 わらば、義貞が最期さいごと思召おもされよとの、詞ことばはよもや違ちがふまじと申上まをたる  
 口元くちぐらに下した必かならず有あ師直しちくは小鼻こはなからし聞居きこゑたる直義ちきぎくはしく聞きし召よし、  
 詳成つまびらかるかほよが返答へんたうさあらんと思おもひし故、落散おちたる兜ぶた四十七、此唐櫃からびつに  
 入置いれたり、見分けさせよと御上意おんじやういの下侍しもざむらひかゝむる腰こしの海老鎧えびよろいを、明あける  
 間ま遅おそしと取出とすを、ためず臆おそせず立寄たてよつて、見れば所も、名なにまねふ、鎌倉  
 山の星兜ほしとつばい頭かしらし、頭かしら、扱指物さしの家いへの、流義りうぎに寄よるぞかし、或  
 ハ直平筋兜ちくへい、鍛かじのなきは弓ゆみの爲ため、其主そのぬしの好迎このむかひ、數かず多おほき其中そのうちにも、五枚兜まいぶた  
 の龍頭りゆうづつ是こゝぞといわぬ、其内そのうちに、ばつどかぶりま名香なかうは、かほよが馴なれ義貞

の兜にて御座候と指出せば、左様ならめど一決し鹽治桃井兩人の寶藏に納べしこなたへ來れど御座を立かほよに暇給はりてだんかづら  
を過ぎ給へば、鹽治桃井兩人も打連れてこそ入にける、跡にかほよいつ  
きはなく、師直様の今暫し御苦勞ながらに役目を、に仕舞有つてにえづ  
かに、暇の出た此かほよ、長居の恐れにさらばど、立上る袖摺寄つてま  
つとひかへ、まわに待ち待ち給へ、けふの御用仕舞次第、其元へ推參し  
て、お目にかける物が有る、幸ひのよい所召出された直義公は、我爲の結  
ぶの神、御存の如く我等歌道に心を寄せ、吉田の兼好を師範と頼ま日よ  
の狀通其元へ届くれよと問合せの此書狀、いかにもどのに返事、口上  
でも苦しうないど、袂から袂へいる、結び多、顔に似合ぬ様參る武藏鑑  
と書いたるを、見るかはつと思へ共、はしたなう耻まめて、却て夫どの  
五名の出る事持歸つて夫どに見せふか、いや、夫での鹽治殿、憎しと思

## 六

六ふ心から怪我過にもならふかど、物をもいはず投返す、人に、見せじと手に取上、戻すさへ手にふれたりと思ふにぞ、我多ながら捨も置かれず、くどうの云ぬ、よい返事聞迄の、くどいてくどき抜く、天下を立ふとふせふ共儘な師直、鹽治を生けふと殺そふ共、かほよの心たつた一つ、何とそふではあるまいかど、聞にかゝるよが返答も、涙ぐみたる計なり折から來合す若狭助、例の非道と見て取る氣轉かほよ殿まだ退出なされぬか、恥暇出て隙どるは却て上への恐れ早に歸りと追立れば、きやつ扱ひけどりしと弱味をくはぬ高師直、又玄てもいはれぬ出過ぎ、立てよければ身が立たず、此度の御役目首尾よう勤させくれよと、鹽治か内證かほよの頼、そふなくて叶ひぬ筈、大名でさへあの通り、小身者に捨知行誰れがかげで取らする、師直が口一つで五器提ふも、知れぬあぶない身代、夫れでも武士と思ふぞや迄と、邪魔の返報にくて口くいつとせき立つ若

狹助、刀のこゝろ口くち破やぶる程握にぎり、詰つめ詰つめられ共神前也御前也と一旦の堪忍かんにん  
も、今一言が生き死の詞の先き手還御くはんぎよぞと、御先まきを拂はらふ聲こゑに詮方なく  
も期きを延のびす、無念は胸に忘られず、悪事悖まかつて運強うんづよく切られぬ高師直を、あ  
すの我身の敵共、しらぬ鹽治が跡押と直義公の悠ゆうとと歩は御成り給ふ御  
威勢おせ、人の兜かぶとの龍頭御藏に入る、數かずも、四十七字のいろは分けかなの  
兜かぶとを和やらげて、兜頭ぶづ巾きんのはころこびぬ國の掟たてまぞ「久かたの

○第二 桃井館の段

空そらも彌生やよひのたそがれ時、桃井若狹助安近の館の行義ぎやうぎはき掃除そうじに庭の松  
も幾いく千代を守る館の執權しつけん職しよく加古川本藏行國年も五十いその分別ぶんべつ盛さかり上下も  
ため付け書院先き、あゆもくる共白洲しろすの下人したうど、關内せきない、此間こゝに上あみには  
でつかちなぬ拵しらへ、都からの朧おどろ客人きやく、さのふの鶴が岡の八幡へ御社みやま參  
ねびた、しい朧物入おどろものいり、其銀かねの入目がほし、其銀が有たら此可介こけい名を

改めてあらた樂たのしむになア何なにじや名なを改めて樂たのしむとは珍めづらしい、そりや又何  
 と替かへる、ヘテ角助かくすけと改めて胴たうを取とて見る氣きまばかつ、らなわりやしうな  
 いかぎのふ鶴つるが岡おかで、是こゝの旦那だんな若狹助わかつたすけ様、いかふ不首尾ふしゆびで有あつたげな、子  
 細こはしらぬか師直殿しぢくどのが大きな耻ちをか、せたど、奴部屋やつこべやの噂うわさ定さだめて又無  
 理りをぬかして、れ旦那だんなをやりこめたつたであるときさかなき口くち、何  
 をさば、とやかまし、これ上の取とざた殊ことに御前ごぜんの御病氣ごびやうき、お家の耻ち辱と  
 に成なると有あらば此本藏このほんざう聞流きりゆうかし置くべきや、禍わざはひは下部かぶこの嗜たしな掃除かみゆじの役目  
 仕廻しわいたら、皆みないけ、と和わらかに女小性にょせうせいか持出もちだるたば、輪わをふく雲う  
 ふく、廊下ろうか音ねなふ衣きぬの香かや、本藏ほんざうがほんさうの一人ひとり娘むすめの小浪こなみ、察しやう母ぼのど  
 なせ諸共しよごにしとやかに立出たれば、是こゝは、兩人ふたり共御前ごぜんのれ伽がは申まさい  
 で、自身おんしんの遊あそびか不行ふ儀ぎ千萬せんまん、今日けふは御前ごぜん様殊ことの外の御機嫌ごきげん、今いまちや  
 く、とれ休やすみ夫つまで、母様ははさま、申し本藏ほんざう殿、先程さきほど御前ごぜんの御物語ごものがたり、きのふ小浪こなみが



申し合せ、判官殿よりのお使ならんこなたへ通せ、コレどなせ其方は御口  
上受取り殿へ其通り申上げられよ、お使者は力彌、娘小浪と言号の聲殿、  
御馳走申しやれ先づ奥方へ御對面と云ひ捨、一間に入にける、どなせの  
娘を傍近くなふ小浪と、様のかたくろまいの常なれど、今おつしやつ  
た御口上、請取る役はそなたにと有りそな所を、どなせにとは母が心ど  
はきつい、違ひ、そもしも又力彌殿の顔も見たかろ、逢たかろ、母にかつ  
て出むかや、いやか、と問返せば、あい共いや共返答はあからむ顔  
のねぼこぎよ、母は娘の心を汲、娘せなを押ししたも、是は何と遊ば  
せしとろろたへさのげば、なふけさからの心づかひ又持病の癩が指  
込んだ、是ていどふもお使者に逢れぬ、娘太義ながら御口上も受け  
取、御馳走も申したも、お主と持病には勝れぬ、とそろ、と立上  
り、娘や随分御馳走申しや、またが餘り馳走過ぎ、大事の口上忘れまい

ぞ、わえも智殿にアイ、あいたからうの奥様の氣を通してぞ奥へ行、小湊  
は御跡伏拜たがみ、忝アハい母様、日頃戀し床ゆかえい力彌様、あゝとふいをか  
ういをと娘心のときく、と、恚いに小湊を打寄する、疊たひさはりも故實こじつを亂たひ  
ま入來る大星力彌、まだ十七の角髮つのかみ、や二つ巴とらへの定紋ぢやうもんに大小、立派りつぱさはや  
かに遠ます大星由良助が子息しそくと見へし其器量きりやう、しづく、と坐まに直ちまつたそ、恥  
取次しりぞぎ頼奉たのまると慇懃いんぎんに相述のふる、小湊はつと手をつかへ、つと見か  
す顔かほと顔互あひの恚いに戀人こひと、物も得えぬ、ぬ赤面せきめんは、梅うめと櫻さくらの花相撲なすまよに枕まくらの  
行司ぎょうじなかりけり、小湊漸おそ恚い押しまづめ、是こゝはく、御苦勞ごくろう千万せんまんにようこそ  
恥出はぢ、只今の御口上受け取る役は私、御口上の趣おもひを、恥前はぢの口からわたし  
が口へ直ちまつに恥はぢつしやつて下さりませと摺寄すりよバ身みをひかへ、是こゝれは  
く不作さ法ほう千万せんまん、惣おじて口上受け取り渡し、行義ぎやうぎ作法さ第一だいいちと疊たひをさ  
り手をつかへ、主人しゅじん鹽谷判官しほやはんくわんより若狹助様への御口上、明日は管領直義くわんりやうぢぎ

公へ未明みけいを相詰つめ申す筈の所、定めて罷客人も早はやくに罷出であらん、然れば  
 判官若狭助兩人は、正七ツ時に屹度きとど御前へ相詰よと師直様を御仰、万事  
 間違まちがひのなき様に、今一應いっそう御使者に參れと、主人判官申付け候故右の仕合  
 此通若狭助様へ御申上げ下さるべと、水みづを流せる口上に、小浪はううか  
 り顔見とれとかふ、諾いなもなかりけり、聞たきく使太義と若狭助、一間を  
 立出、昨日けふ別れ申てを、判官殿間違て罷目にか、ららず成程正七ツ時に  
 貴意得奉らん、委細承知仕る判官殿にも御苦勞千万と、宜しく申傳へて  
 くれられよ、罷使者太義、然らば罷暇やすみ中上なごん、罷取次の女中御苦勞と、し  
 づづく立て見向もせず、衣紋いもん繕つくろひ立歸る、本藏一間へ立かはり、殿どの是に  
 御入彌いんぎ明朝は正七ツ時に御登城御苦勞千万、今宵も最是九ツ、暫く御間  
 睡遊どろかばされよ、成程なごく、何に本藏、其方にちと用事有密ひそくの事、小浪を  
 奥へおくく娘、用事ようじあらば手を打ふ奥へおくくと娘を追やり、合點あての

行かぬ主人の顔色と御傍へ立寄り、先き程方ね伺申さんと存せし所委細具に御仰、下さるべしと指寄ばにじり寄り、本藏今此若狭助が云い出す一言、何に寄らず畏り奉ると二言と返さぬ誓言聞ふ、ハテ是はく改まつた御詞畏り入り奉るではござれ共、武士の誓言はならぬといふのか、  
左にわらず、先つ委細とつくど承はり、子細をいはせ跡で意見か、イ夫れは詞を背くか、何と、ハはつと計指しうつむき暫く、詞なかりしが、胸を極めて指添扱、片手に刀拔出し、てうくくと金打し、本藏が心底かくの通り、どいめも致さず他言をせぬ、先づ思召の一通りおせきなされずと、本藏めが胃の腑に、落付く様にとつくりと承はらんと相述る、ハ、一通り語つて聞せん此度管領足利左兵衛督直義公、鶴が岡造營故、此鎌倉へ御下向、御馳走の役ハ鹽治判官、某兩人承はる所に、尊氏將軍の仰にて、高師直を御添人、万事彼が下知に任せ御馳走申上げよ、年ばいといひ諸

四一

事物馴たる侍と、御意に随ひ勝つに乗つて日頃の我儘十倍増都の諸武士並居る中若年の某を見込み雑言過言眞つ二つにと思へ共、此上の仰を憚り、堪忍の胸を押へしは幾度明日は最早了簡ならず、御前にて耻面か、せる武士の意路其上にて討て捨る必留るな、日頃某を短慮成と奥を始先其方が異見幾度か胸にとつくと合點なれ共、無念重る武士の性根、家の斷絶奥か歎き、思はんにていなければ共、刀の役目弓矢神への恐れ、戰場にて討死はせず共、師直一人討て捨れば天下の爲、家の恥辱にはかへられぬ、必す短氣故に身を果す、若狭助、猪武者よろろたへ者と、世の人口を思ふ故、汝にとつくと打明すと、思ひ込んだる無念の涙、五臓を貫く思ひなり、横手を打てしたりく、よう譯をたつしやつたよう御了簡なされた、此本藏なら今迄了簡ならぬ所、本藏、何と云うた、今迄はよう了簡えた堪忍したとは、わりや此若狭助をさみするか是かた詞共

覺ず冬ハ日かけ夏は日面たもとよけて通れば門かどの中にゆきちがらて行違の喧嘩けんか口論こうろんな  
 いと申まをの町人の譬たとへ、武士の家では杓子しゃくし定規じやうき除よけて通せばほうずがない  
 と申すのが本藏ほんざうめが誤あやまりか、御詞ごことばさみ致いたさぬ心底こころ侈覽しやらんに入いれんと御傍ごそばの  
 ちいさ刀やいば抜ひくも早く書院しよゐん成なる召めいがへ草履ぞうりかたし片手かたての早はやねたば、どつ  
 くと合せ椽せん先まへきの松まつの片枝かたえだ、すつばと切きて手てばしかく鞆たもとに納たまめ、殿とのま  
 つ此通このとほりりにさつぱりと遊あそばせ、いふにや及およぶ、人や聞きくと遷あたりに氣きを  
 付け今夜このよのまだ九ここのツつたりと一ひと休みやすみ、枕まくら時とき計けいの目覺めざまし本藏ほんざうめが玄けんか  
 け置く早はやく、聞き入い有あつて満足まんぞくせり、奥おくにも逢あて餘所よそながらの暇いとま乞こひ  
 逢あぬぞよ本藏ほんざう、さらばと云い捨て奥おくの一ひと間まに入い給たまふ武士ぶしの、いさぢ  
 は是非ひもなし、御後ごごかけ見送みおくり、勝手かたて口くちへ走はり出で、本藏ほんざうが家來けらい共馬引どもまひ  
 け早くといふ問ともなく、だち玄けんやんとり、しびに御庭ごにわに引ひき出でせ  
 ば、椽せんがひらりと打乗うちまて師直しちくの館迄たねまで、つゞけやつゞけと乗のり出です、轡うまづなに繩なは

とどなせ小浪コシくどこへ、始終シジウの様子は聞ました年にこそよれ本藏殿、主人に御異見ミケンも申さず、合點行ぬ留ますと、母と娘がぶらくく、戀コイにすがり留とどむればミヤ小差出た、主人のた命た家の爲思ふ故に此時宜必此事殿へゆさた致すな、た耳へ入したら娘は勘當カンタウとなせ、夫婦の縁を切、家來共道にて諸事を言付ん、そこ退のけ兩人イハく、面倒メンダウなど鏝あがみの端一、當てはつしと當てられて、うんと計りたのつけに反そるを見向きもせず、家來ついで續と馬煙けいり追つ立て打つ立て力ら足ふを立て、こそ、かけり行

○第三 戀歌の意趣

足利左兵衛督直義公、關八州の管領へんれいと新あらたに建たてし御殿の結構、大名小名美麗たれを飾かざる公裝束、鎌倉山の星月夜と袖を列つらねる御馳走ちまうに、た能役者のうの裏門口、表御門おもてにた客人御饗應もてなしの役人衆、正七ツ時のゆ登城武家の威光ゐくわうを耀やまける、西の御門の見付けの方、くくといかめしく挑燈ちやうちんてらし入來るの、

武藏守高師直權威を顯はす鼻高く、花色摸様の大紋に、胸に我慢の立て  
鳥帽子、家來共を役所へに殘し置き、下部僅に先きを拂はせ、主の威光  
の召れろし、鶴の真似する鷺坂内、肩臂いからし申れ、旦那今日の御前  
表も上首尾へ、鹽治で候の、桃井で候のと、日頃はどつばさつばとど  
ぞ免けど、行儀作法は狗を、家根へ上げた様で、去りとはへ腹のかは、  
夫に付き兼る鹽治が妻かほよ御前、いまだ殿へ御返事致さぬ由、氣に  
いぎへられぬ、器量はよけれど氣が叶はぬ、何の鹽治づれど、當時出頭の  
師直様と、聲高に口利な、主有るか不よ、度る歌の師範に事寄せ、くど  
け共今に叶へぬ、則ち彼れが召使、かるといふ秘新參と聞、きやつをこそ  
付て頼んで見ん、扱まだ屑が有る、かほよが誠にいやならば、夫鹽治に子  
細をぐいらり打明ける、所を云はぬは樂しみと、四つ足門のかたかげに  
主從黙頭咄し合ふ折もあれ、見付に扣へし侍わはたゞしく走り出我る

見付けのね腰かけに扣し所へ、桃井若狭助家來加古川本藏、師直様へ直  
 きに御目にかゝらん爲、早馬にてね屋敷へ參つたれ共、早御登城、是非御  
 意得奉らんと、家來も大勢召連たる躰、いかゞ計ひ申せんやと聞くより  
 伴内騷出し、今日御用の有る師直様へ直きに對面とは推參也、某直談と  
 走り行を待て、伴内子細に知れた。一昨日鶴が岡にての意趣ばらし、  
 我手を出さず本藏めに言付け、此師直が威光の鼻をひしがん爲、いづく  
 内ぬかるな、七ツにはまだ間もあらん、是へ呼出せ仕廻てくれん、成程、  
 家來共氣をくばれど、主従刀の目針をしめし、手ぐすね引て待かけ居る、  
 詞に隨ひ加古川本藏、衣紋繕ひ悠々と打通り、下部に持せ、進物共、師直  
 が目通りにならべさせ、遙きがつて踞り、憚りながら師直様へ申上奉  
 る、此度主人若狭助、尊氏將軍を御大役仰付られ下さる段、武士の面目身  
 に餘る仕合、若輩の若狭助、何の作法も覺束なくいかゞあらんと存る、

に、師直様萬事御師範しはんを遊ばされ、諸事を御引廻し下され候故首尾しゆひ能御  
 用相勤つとめるも全主人まったくが手柄てがらにあらざ、皆師直様の御執成とりまじと、主人を始め奥  
 方一家中、我々迄も大慶けい此上や候べき、去るによつて近頃些少させうの至いたりに候  
 へ共、右御禮の爲一家中々の贈り物、御受け遊ばされ下さらば、生前しやうぜんの面  
 目め一入願奉る、則ち目錄御取次と伴内に指出せば、ふしぎそふにそつと  
 取り押開おしひらき、目錄もく一トつ巻物卅本黄金わうこん三十枚若狹助奥方、一トつ黄金廿枚家  
 老ちやう加古川本藏、同十枚番頭ばんがしら、同十枚侍中、右の通りと讀上よみれば、師直は明い  
 た口ふさがれもせずうつとりと、主従顔を見合せて、氣ぬけの様にきよ  
 ろりつと、祭まつりの延のびた六月の晦日つひ見るが如くにて、手持ちぶさたに見へに  
 けり、俄にわかに詞改めて是は調はくはく悼入いたかたる仕合、伴内こりやとふした物ハチ  
 扱ハチて辭宜いざ申さば志背こころがしそむくといひ、第一は大きな無禮、エ、式作法しきさつを教  
 るも、こんな折にはとんとこまる、ものじやい、イヤヤ本藏殿、何の師範しはん致す



御門前鹽冶判官高定登城成りど音なひける、門番罷出、先程挑井様御登  
 城遊ばされ御尋、只今又師直様御越にて御尋、早御入と相述る、勘平最  
 早皆御入とや遅なはりし残念ど、勘平一人御供にて御前へこそは急  
 き行奥の御殿は御馳走の連謠の聲播磨がた、高砂の浦に着にけり、  
 謠ふ聲門外へ、風が持てくる柳かげ、其柳々風俗はまけぬ所躰の十八  
 九松の縁の袖眉もかたいやしきに物馴し、さぞく帽子の後帯供の奴が  
 挑燈は鹽冶が家の紋所御門前に立休らひ、奴どの、やがてもふ夜も明  
 ける、こなた衆は門内へは叶はぬ、爰からいで休んでやど、詞に随ひく  
 ど供の下部は歸りける、内を覗て勘平殿は何してぞぞふぞ逢たい用が  
 有ると見廻す折から後かげ、ちらと見付け、たかるじやないか、勘平様逢  
 たかつたにようこそ、合點の行ぬ夜中といひ、供をも運ず只一人  
 さいなわ、爰迄送りし供の奴は先へ歸した、わし獨残りしは、奥様からの

ね使ぢふぞ勘平に逢て此文箱判官様のね手に渡し、ね慮外ながら此返  
 歌をね前のね手から直ぐに師直様へ、ね渡しなされ下さりませと傳へ  
 よまかし、ね取込みの中間違ふまい物でなし、今宵はよしにせうとの  
 ね詞わたしはね前に逢たい望何の此歌の一首や二首、ね届けあさる、  
 程の間のない事は有るまいと、つゝ一走り走つてきた、しんぞやと  
 吐息つく、然らば此文箱且那の手から師直様へ渡せばよいじや迄、せり  
 や渡ししてこふ待て居いといふ中に門内を、勘平くく判官様が召ま  
 する勘平く、只今それへ、せはしないと袖ふり切て行跡へ、齧ふ  
 む足付き鷺坂伴内、何とねかる戀の智恵、又格別勘平ゆとせ、くつて  
 居る所を、勘平く、且那がね召しと呼んたはきつい、師直様がそ  
 もじに頼たい事が有とねつしやる、我等ハそ様にたつた一度、君よく  
 と抱付くを突飛し、みだらな事遊ばすな式作法のね家に居ながら狼

藉<sup>せき</sup>千万、あたふ作法な、あたふ行儀と、突退<sup>つきつけ</sup>れば夫れは難面<sup>つれな</sup>、くらがり紛れ  
 につゐちよこ〜と、手を取争<sup>あつて</sup>ふ其中に、伴内様<sup>ばんないさま</sup>〜師直様の急御用伴  
 内様〜と、奴二人がうろ〜眼玉<sup>めだま</sup>でははしたり伴内様、最前<sup>もくぜん</sup>から師直  
 様が御尋、式作法の祓家に居ながら、女を捕<sup>とら</sup>へ、あたふ行儀な、あたふ作法  
 と、下部が口<sup>くち</sup>と、同じ様に何ぬかすと、頬<sup>ほ</sup>ふくらしして連れ立行、勘平跡へ  
 入<sup>い</sup>かひり、何<sup>なに</sup>と今の働<sup>はたら</sup>見たか、件内めが一ぱいくらふてうせをつた、おれ  
 が来て旦那<sup>だんな</sup>が呼<sup>よ</sup>ぶやるといふと、おけ古いとぬかすか面倒<sup>めんたう</sup>さに、奴共に  
 酒呑<sup>のま</sup>せ古いと言さぬ此術<sup>てくて</sup>、ハ〜まんまと首尾<sup>しゆび</sup>の仕課<sup>はな</sup>た、サア其首尾<sup>しゆび</sup>序<sup>ついで</sup>にな、  
 ちよつと〜と手を取れば、ハ〜扱はづんだ、アまちやいの、何いはんすや  
 ら、何の待つ事が有ぞいなわ、もふ頼<sup>たの</sup>て夜が明るわいな、せひに〜にせ  
 ひなくも下地<sup>げぢ</sup>は好也<sup>すき</sup>御意<sup>ごい</sup>いよし、夫<sup>つと</sup>でも爰<sup>こゝ</sup>は人出入、奥<sup>おく</sup>の謠<sup>うたひ</sup>の聲高砂、せ  
 うこんによつてこしをすれば、謠<sup>うたひ</sup>で思ひ付いた、腰<sup>こし</sup>かけでと手を引

合打連れて行、脇能過きて御樂屋に鼓の調太鼓の音、天下泰平繁昌の壽  
 祝ふ、直義公、御機嫌な、めならざりける若狹助は兼て待つ師直運と御  
 殿の内、奥を窺ふ長袴の紐まめく、り氣配し、已師直眞つ二ツと刀のこ  
 ろ口息を誥待共しらぬ、師直主従遠目に見付け、是は若狹助殿、扱  
 御早以御登城、我折ました、我等閉口、閉口序に貴殿に言讒致し、  
 恥詫申す事が有と、兩腰くはらりと投出し、若狹助殿改て申さねばなら  
 ぬ一通り、日外鶴が岡で、拙者がやた過言、恥腹が立つたで有ふ尤じや  
 が、そこを恥詫、其時いどふやらした詞の間違でつゝ申した、我等一生の  
 奮忽武士が、手ささげる眞平、假令其元が物馴れた人なりやこそ  
 外々のうろたへ者で見さつしやれ、此師直眞二ツとはや、有やうが  
 其節貴殿の後かけ、手を合して拜ました、年寄るとやくたい、年  
 にめんじて御免、是さ、武士が刀を投出し手を合す、是程に申す



拜した次の間にそ扣へ居る程もあらず鹽治判官御前へ通る長廊下  
 師直呼かけ遅し、何と心得てござる、今日は正七ツ時と、先刻から申  
 渡したでないか、成る程遅なはりしは不調法去ながら、御前へ出るはま  
 だ間もあらんと、袂々文箱取出し、最前手前の家來が貴公へお渡し申く  
 れよ、則ち奥かほよ方々参りしと、渡せば受け取成程、其元の御内  
 實は扱ふ心がけがござるは、手前が和歌の道に心を寄るを聞、添削を頼  
 むと有、定めて其事ならんと押しひらき、さなきだに、おもきが上のさよ  
 衣、わがつまならぬつまな重ねそ、是は新古今の歌、此古歌に添削とは、  
 とくと思案の内、我が戀の叶はぬ願扱は夫とに打明けしと思ふ怒をぞ  
 あらぬ顔判官殿、此歌御らうじたて御ざらふ、只今見ました、手前が  
 讀のを、貴殿の奥方はきつい貞女でござる、ちよつと遣りさるゝ歌が  
 是じや、つまならぬつまな重ねそ、貞女、其元のあやかりもの、登

城も遅たそなはる筈の事、内に斗りへばり付いてござるによつて、御前の方  
 はれ構かまひないじやて、當あてこする雑言過言ざうごんくわごん、あちらの喧嘩けんかの門違かまぢがひとは、判官さ  
 ぶに合點行かず、むつとせしが押しづめ、聞是はく師直殿には御酒  
 機嫌きげんか、御酒參つたの、いつもらしやつた、イヤ、いつ呑みました、御酒下され  
 ても呑のみいでも、勤つとめる所は急度きつと勤る、貴公はなせ遅たそつたの、御酒參つたか、イヤ  
 内にへばり付いてござつたか、貴殿より若狭助殿、格別かくべつ勤められます、  
 イヤ、又其元の奥方は貞女といひ、御器量きりやうと申し、手跡は見事、御自慢おまんなされ、  
 むつとなされな、うそはないいさ、今日御前にはれ取り込こみ、手前迎も同前、  
 其中へ鼻毛はなげらしい、イヤ、是は手前が奥が歌でござる、夫れ程内が太切なら  
 御出御無用、惣躰そうたい貴様の様な、内に斗り居る者を、井戸の鮎あなじやといふ譬  
 が有る、聞てれかしやれ、彼鮎めが僅わずか三尺か四尺の井の内を、天にも地に  
 もない様に思ふて、不斷外だんぐわいを見る事がな、所に彼井戸がへに釣瓶つるべに付

いて上ります、夫れを川へ放しやるど、何が内に浮り居る奴ぞやによほ  
 て悦で途を失ひ、橋杭で鼻を打て、即座にびりくくくくと死まず、貴儀  
 も丁度鮒と申し事、くくと出ほうだ、判官腹にすへ兼、こりやこなた狂  
 氣免さつたか、氣が違ふたか、師直、シャ、こいつ、武士をどらへて氣違ど、  
 出頭第一の高師直、ム、すりや今の悪言ハ本性よなくぞい、又本性な  
 りやどふする、か、かうきると、抜討に眞向へ切り付くる眉間の大疵、是は  
 と沈む身のかいし、烏帽子の頭二ツに切り又切りかゝるを、抜けつく、  
 りつ逃け廻る折もあれ、お次に扣へし本藏走り出て押しと、い、判官  
 様御短慮と、抱とむる其隙に師直は、館を指てこけは、轉つ逃行ば、已れ師  
 直眞つ二ツ、放せ本藏放しやれとせり、合ふ内、館も俄に騒出し、家中の諸  
 武士大名小名、押さへて刀もぎ取やら師直を介抱やら上を下へど、立さ  
 はぐ、表御門裏御門、兩方打とる館の騒動、挑燈ひら免く、大さはぎ、早野勘

九二

平うろ／＼眼走り歸つて裏御門、碎よ破よど打た、き大聲上、鹽治判官の御内早野勘平主人の安否心元なし爰明てたべ早く／＼と呼はつたり、門内々も聲高く、御用あらば表へ廻れ爰ハ裏門成る程裏門合點、表御門は家中の大勢早馬にて寄り付かれず、喧嘩の様子は何と／＼、喧嘩の次第相濟た、出頭の師直様へ慮外致せし科によつて、鹽治判官は閉門仰付けられ、網乗り物にてたつた今歸られしと聞くか、なむ三寶、扨屋敷へと走りか、つて、閉門ならば館へは猶歸られじと行つ、戻りつ思案、最中、婢、かかる道にてはぐれ、勘平殿様子の残らず聞ました、こりや何とせうどふせうと取付き、歎くを取て突退、とめろ／＼とほへ頬、勘平が武士は捨たつたはやい、もふ是迄と刀の柄、待て下され、こりやうろたへてか勘平殿、うろたへた、是がうろたへずに居られふか、主人一生懸命の場にも有り合さず、剩、囚人同前の網乗物、扨屋敷ハ閉門、其家來

は色にふけり御供にはづれしと人中へ、兩腰さして出られふか爰を放  
 せ、待つて下さんせ、尤じや道理トやが、其うろたへ武士には誰かした、  
 皆わしが心から死る道ならぬまへよりわたしは先きへ死なねばなら  
 ぬ、今に前が死んだらばたが侍じやと譽まする、爰をとつくりと聞分け  
 て、わたしは親里へ一先つ来て下さんせ、と、様もか、様も在所でこそ  
 有れたのもしい人もふかう成た因果じやと思ふて女房のいふ事も、聞  
 て下され勘平殿とわつと斗りに泣きしづむ、そふじや尤、そちは新參な  
 れば委細の事は得しるまい、お家の執權大星由良助殿、いまだ本國を歸  
 られず、歸國を待つてお詫せん、一ッ時成り共急がんと身拵する所へ驚  
 坂伴内家來引連れかけ出、勘平うぬが主人判官師直様へ慮外を働か  
 すり疵負し科によつて屋敷は閉門退付け首か飛は知れた事、腕廻せ、  
 連れ歸つてなぶり切り覺悟ひろげとひしめけば、よい所へ懸坂伴内

已れ一羽で喰たらねぞ、勘平か腕の細ねぶか料理鹽梅くふて見よ、物  
 なはハすな家來共畏つたと兩方を捕たどかゝるをまつおせどかい  
 かり、兩手に兩腕捻上はほしくと蹴返せば替はて切込む切つ先きを  
 刀の鞘にて丁と受け廻つてくるを鐙と柄にてのつけにそらし、四人一  
 所に切かゝるを右と左へ一ツ時に、でんがく返しにはたたくと打すへ  
 られ、皆ちりくに行跡へ、伴内いらつて切かゝる引つばづしそつ首握  
 り、大地へどうともんぞり打せしつかと踏付け、どうせうとこつちの  
 儘、突ふか切ふかなふり殺しどふり上る刀に縫て、いそいつ殺すとれ詫  
 の邪摩もふよいわいなと留る間に足の下をばこそくと尻に尾のな  
 り鷲坂は、命からく、逝て行、殘念く去ながらきやつをばらさば不  
 忠の不忠、一先づ夫婦が身を隠し時節を待つて願ふて見ん、最早明け六  
 ツ東がしらむ横雲にねぐらを離れ飛からずかはいくの女夫連れ道

は急げど跡へ引く、主人の御身いかゞぞどあんぞ、行こそ、浮世なれ

○第四 鹽治館の段

鹽治判官閉居へいまによつて扇が谷やうの上屋敷、大竹にて門戸を閉家中の外は出入をどゞめ、事嚴重げんぢゆうに見へにけり、かゝる折にも、花やかに奥は媚めく女中の遊び、みだに所かほよ御前、恥傍そはには大星力彌殿の恥氣を慰めんと、鎌倉山の八重九重色やえこのへと櫻、花籠かこに生けらるゝ花よりも、生ける人、こそ花紅葉、柳の間の廊下ろうかを傳つたひ、諸士頭原郷右衛門、跡に續つづて斧九太夫、是は力彌殿早い御出仕しゅつし、某も國本々親共が參る迄、晝夜相誥罷有つめまかりあるそれ、は御寄時まきど千万と郷右衛門兩手をつき、今日殿の御機嫌きげんは、いかゞに渡り遊はさるゝと、申上ればかほよ御前ごぜん、二人共太義、此度は判官様恥氣語りけつきに思しめし、恥しつらいでも出よふかと案あんぞ、たとは格別、明暮築山の花さかり御覽じて御機嫌のよに恥顔かづらばせ、それもへに自も恥慰なごまに

指上げふと、名有る櫻を取寄せて見やる通りの花拵へ、いか様にも仰  
 の通り、花は開く物なれば御門も開き、閉門を御赦さる、吉事の御趣向  
 拙者も何かなど存すれど、かやうな事の思ひ付きは無重寶成る郷右衛  
 門、肝心の事申上ん今日御上使の礼出と承はりしが、定免て殿の御閉  
 門を御赦さる、御上使ならん何と九太夫殿、そふの恩石されぬか、  
 郷右衛門殿、此花といふ物も、當分人の目を悦ばす斗り風がふけば散失  
 る、こなたの詞もまづ其ごとく、人の心を悦ばさふ迎、武士に似合ぬぬら  
 りくらりと跡から兀る正月詞なせとれいやれ、此度殿の御越度は、饗應  
 の御役儀を蒙りながら、執事たる人に手を負せ館を騒せ、  
 鮮重うて切腹、じたい又師直公に敵對は殿の御不覺と、聞もあへず郷右  
 衛門、扱は其方殿の流罪切腹を願はる、か、願ひは致さねど、詞を飾す  
 眞實を申すのじやもどをいへば郷右衛門殿、こなたの啓書しはざから

## 四三

發た事、金銀を以つて頬をはりめぐるれば、个様な事は出来申さぬと、己が心に引き當て、欲面打けず、郷右衛門、人に媚諂ふは侍でない武士でないなふ力彌殿、何とそふでは有まいかと、詞の角をなだむる御臺、二人共に争ひ無用、今度夫の御難義なさる、元との發は此かほふ、日外鶴が岡で響應の折かゝ、道しらずの師直、主の有自に無体な戀を云かけ、様ととくどきしが、耻をあたへ戀をせんと判官様にもしとを、歌の點に事寄せ、さよ衣の歌を書き耻しめてやつたれば、戀の叶はぬ意趣ばらまに判官様に悪口、元來短氣なれ生れ付き得堪忍なされぬは、れ道理でないかいのど、語り給へは、郷右衛門力彌も、供に御主君の、御憤りを察し入、心外面に顯はせり、早御上使の御出と、玄關廣問ひしめけば、奥へかくと通じさせ、御臺所も座をさがり、三人出向ふ間も、あく、入來る上使は、石堂右馬之丞、師直が、昵近、藥師寺次郎左衛門、役目なれば、罷通ると會釋もなく上

坐まにつひ着はば、一間の内々鹽冶判官しほじはんぐわんまづくと立出たははく御上使ごじょうしと有て  
 石堂殿御苦勞いしどうだんごくろう千萬先づ杯さかづきの用意よういせよ、御上使ごじょうしの趣承すゑじやうはり、いづれもと  
 一献酌積いっけんしやくせき鬱うつをばらし申さん、チ、それようござろ、藥師寺も罷間あい致さふ  
 したが上意じやういを聞かれたら、酒ものど咽のどへ通とるまいとわざ笑わらへば右馬之みぎうま之の際さい我  
 我今日上使われけふじやうしに立つたる其趣具そのすゑぐに承知せうちせられよと、懷中くわいちゆうの御書取ごしよと出し、押  
 し開ひらけば判官はんぐわんも席せきを、改あらため承うはる其文言そのごんごう此度鹽冶判官高定、私の宿意しゆくいを  
 以もて執事しつじ高師直たかぢきを刃傷やんきやうに及び、館たねを騷さわせし科とがによつて、國郡こくぐんを没収もつしゆし、切  
 腹申付きりはらくる者ものなり、聞きよりはつと驚おどろく御臺ごたい並居なみる諸士しよしも顔見かほみ合せ呆果あまがれ  
 たる計はかりなり、判官はんぐわん動どうずる氣色けしきもなく、御上意ごじやういの趣委すゑい細承知さいせうち仕つかる、扱あ是こゝから  
 は、各たのの御苦勞ごくろう休やすめに打うちくつろいで御酒ごしゆ一いっつ、判官はんぐわんだまりめされ、其  
 方かたが今度の科とがは、縛しばり首くびにも及およぶべき所ところ上うへの慈悲ひを以もて、切腹きりはら仰付おんづけ  
 らる、を有あがたう思おもひ、早速さつそく用意よういもすべき筈はず、殊ことに以もて切腹きりはらには定さだまつ

た法の有物、夫れに何ぞや、當世様の長羽織ながはねおりぞべらくとしらる、は酒しゅ  
 興きようか但し血迷ちまよふたか、上使に立たる石堂殿此藥師寺へ不作法ふさほうと、さめ付  
 くればにつこと笑ひ、此判官酒興しゅけいもせず血迷ちまよひもせぬ、今日上使と聞よ  
 りも、斯かあらんと期きしたる故、兼ての覺悟かくご見すべしと、大小羽織を脱捨ぬぎれ  
 ば、下には用意よういの白小袖無紋の上下死裝束しやうそく、皆よ是ほど驚けば、藥師寺は  
 言句ことくも出ず、顔ふくらしして閉口へいこうす、右馬之丞指寄て、御心ごこころ底察し入る則ち  
 擗者けんし檢使の役心靜しづかに御覺悟ごかくご、御深切ごしんせつ忝かたじけなくし、刃傷やんがうに及びし、斯かあらんと  
 は兼ての覺悟、恨むらくは館にて、加古川本藏かこがわほんざうに抱留だうりゅうられ、師直しぢくを討うちもら  
 し無念骨髄むねんこつずいに通つて忘れがたし、港川みなとがわにて楠正成くすのまさなり最期さいごの一念によつて  
 生しょうを引くといひしごとく、生きかへり死かへり、鬱憤うつぱんを晴はらさんと怒いかりの聲  
 と諸共に、お次の襖打た、き、一家中いけちゆうの者共、殿の御存生ごぞんせいに御尊顔ごそんげんを拜はいし  
 たき願ひ、御前へ推參致さんや、郷右衛門殿取次と、家中の聲と聞ゆれ

ば、郷右衛門御前に向ひ、いかゞ計はからひ候はん、フ、尤成る願ひなれ、共由良助  
 が參る迄無用く、はつと斗り一ト間に向ひ、聞聞きる、通りの御意なれば、一  
 人も叶かなぬく、諸士は返す詞もなく、一ト間もひつそとし、づまりける、力彌  
 御意を承はり、兼て用意の腹切刀御前に直せば、心靜しずかに肩衣取退座のけをく  
 つろげ、御檢使けんし、御見届け下さるべしと、三方引寄せ九寸五分押し戴いたさ  
 力彌く、由良助は未だ參上仕りませぬ、フ、存生ぞんせいに對面たいめんせで殘念ざんねん、殘  
 り多やな、是非ぜひに及ばぬ是迄と、刀逆手に取直し、弓手に突立引廻す、御臺  
 二目と見もやらず口に稱名せうめい目に涙、廊下ろうげの襖踏開ふすまひらき、かけ込む大星由良  
 助、主君の有様見るよりも、はつと斗りにとふと伏、跡に續つづて千崎矢間せんざきやま、其  
 外の一々家中ばらくどかけ入たり、由良助待兼まちかねたいやい、御存生ぞんせいの  
 御尊顔おんそんがんを拜はいし、身に取て何程か、我も満足まんぞくく、定て子細聞しさいたであろ、エ、  
 念口惜ねんくちいはやい、委細承知いさいせうち仕る、此期このきに及び、申上る詞もなま、只御最期おんさいご

の尋常（じんじょう）を願（ねが）はしう存（ぞん）まする、チ、いふにや及（およ）ぶと諸手（しよて）をかけぐつくと、  
 引き廻（まわ）し、くるしき息（いき）をほつとつき、由良助（ゆりすけ）、此九寸五分は汝（な）へ篋（かたみ）、我（われ）懲（ちやう）憤（ふん）  
 を晴（はら）させよと、切先（きりさき）にてふゑ、刎（はね）切血刀（きりち）投げ出しうつおせに、どうとま  
 ろひ息絶（いきたの）れば、御臺（ごたい）を始め並ぬる家中、眼（まなこ）を閉（とぢ）息（いき）を誥（つひ）齒（は）を喰（く）しぱり扣（ひか）ゆ  
 れば、由良助（ゆりすけ）にじり寄り刀取上げ押戴（おしいた）、血（ち）に染る切先（きりさき）を打守りくく拳（こぶし）  
 を握（にぎ）り、無念（むねん）の涙（なみだ）いらくく、判官（はんくわん）の末期（まつご）の一句五臟六腑（ごじやうりくぷ）にしみ渡り、扱（あ）  
 こそ末世（まつせ）に大星（おほせほし）が、忠臣義臣（ちゆうしんぎしん）の名（な）を上げし根ざしは斯（かく）としられけり、藥  
 師寺（にじうじ）いつつ立上り、判官（はんくわん）がくたばるからは早（はや）く屋敷（やしき）を明け渡せ、イヤさは  
 いのれな藥師寺（にじうじ）、いはゞ一國一城（いこくいちじやう）の主（ぬし）、ヤア旁葬（かたけさう）の規式（ぎしき）取賄（まか）ひ、心しづか  
 に立退（の）れよ、此石堂（いしどう）は檢使（けんし）の役目（やくめ）、切腹（きりはら）を見届（みと）けたれば、此旨（このめ）を言上（ごん）せん、  
 由良助（ゆりすけ）殿（の）、御愁（ごしゆう）傷察（やうさつ）し入、用事（ようじ）あらば承（うけたま）はらん必心（かな）にかれなど、並居（なみい）る  
 諸士（しよし）に目禮（めらい）し悠（ゆう）として立歸（た）る、此藥師寺（にじうじ）も死體（しにかた）片付（かた）る其間（そのま）、奥（おく）の間（ま）で

休息せう、家來參れと呼出し、家中共が、らくた道具門前へはうり出せ、  
 判官が、所持の道具、伊浪人にまげられなど、館の四方をぬえ廻し、一問の  
 内へ入にける、御臺はわはと聲を上げ、扱もく、武士の身の上程悲い物  
 の有べきか、今夫の御最期に言たい事は山なれど、未練など御上使の  
 さげしみが、耻しさに、今迄こらへて居たわいの、以とをしの有様やど、亡  
 骸に抱付き前後も、わかす泣給ふ、力彌參れ、御臺所諸共亡君の御骸を、御  
 菩提所光明寺へ早と送り奉れ、由良助も跡を追付き、葬の規式取行  
 はん、堀矢間小寺間其外の一家中道のけいと致されよど、詞の下を御乗  
 物手昇にかきすへ戸をひらき、皆立寄りて御死骸涙と供に、のせ奉りし  
 づくとかき上れば、御臺所の正躰なく歎き給ふをなぐさめて、諸士の  
 めんく、我一と、御乗物に引つ添く、御菩提所へと急き行く、人を御骸  
 見送くりて、座につけば斧九大夫、何大星殿、其元は御親父八幡六郎殿

○四

の家老職、拙者連も其右には座せ共、今日も浪人となり、妻子をはごくむ  
 術なし殿の貯置き給ふ御用金を配分し、早く屋敷を渡さずば、薬師寺殿  
 へ無禮ならん、千崎が存るには、さすがの高師直、存命なるが我々が懺  
 憤討手を引受け此館を枕として、これ、討死とは悪い了簡親九太  
 夫の中さるゝ通り屋敷を渡し、金銀を分けて取が上分別と、評議の中に  
 由良助、黙然として居たりしが、只今の評定に、彌五郎の所存と、我胸中一  
 致せり、いゝ亡君の御爲に、我々旬死すべき筈、むざむざと腹切ふより、  
 足利の討手を待受け、討死と一決せり、何といはるゝ、よい評定かと思  
 へば、浪人の瘦顔はり、足利殿に弓ひかふ、夫れは無分別、此九太夫合  
 點がいがぬ、親父殿そふじやく、此定九郎も其意を得ぬ、此談合には  
 はおいて貰ふ、長居の無益に歸りなされ、夫れよかる、以づれもゆるりと  
 居めされど、親子打連れ立歸る、欲頼の斧親子、討死を聞かぢして逃歸

つたる臆病者おくびやう、きやつ構はずと大星殿討手を待つ御用意ごようい、さきはが  
 れな彌五郎、足利殿に何恨有て弓引べき、彼等親子が心底ていをぎぐらん爲  
 の計畧けいりやく、薬師寺に屋敷を渡し、思ひおもひに當所を立退都山科ついでつやまのにて再會さいかいし、  
 胸中むちゆう残さず打ち明けて、評議ひやうぎをしめんといふ間もあらせず、次郎左衛門  
 一、間を立ち出、べんべんと長詮議ながせんぎ、死體片しにかた付けたら、早く屋敷を明け渡  
 せど、いがみか、れば郷右衛門ごうゑもん、成程なほに待ち兼、亡君ぼうくん所持しよぢの御道具、其外  
 の武具馬具ぶぐばぐ迄よく、改め請あらたとられよ、由良助殿退散たいさんあれ、ち、心得た  
 りとしづくと立上り、御先祖代ごせんぞ、我も代わがしろ、晝夜しゆうやつめたる館の内け  
 ふを限りと思ふにぞ、名残惜なごりげに見返り、御門外へ立出れば、御から  
 送り奉り、力彌矢間堀小寺追ぢまほりに馳歸り、扱はは屋敷を渡し有たか、此上  
 は直義の討手を引受け討死せんと、はやり立たば由良助ゆらすけ、今死べき所  
 にあらず、是を見よ旁かたわらと、亡君ぼうくんの御篋ごかたかを抜き放し、此鋒こゝろには、我君の御血を

わやし、御無念の魂を殘されし九寸五分、此刀にて師直が、首かき切て本意をどげん、實尤と諸武士の勇やしきの内には、藥師寺次郎、門の貫の木ばつしと立てさせ、師直公の罰が當り、扱よいざまゝと、家來一度に手をたゝき、どつと笑ふときの聲、ア、聞れよと、若侍取て返すを由良助、先君の御憤り晴さんと思ふ所存はないか、はつと一度に立出しが、思へば無念と館の内を、ふり返りく、はつたと睨で、立出る

○第五 鎮炮場

鷹は死ても穂はつまずと譬に洩す入る月や、日數も積り山崎の邊に近き詫住居、早野勘平若氣の誤り世渡る望姓細道傳ひ、此山中の鹿猿を打て商ふ種が嶋も、用意に持や袂迄鎮砲雨のしだらでん、誰が、氷無月と白雨の晴間を爰に松のかけ、向ふ方來る小挑燈是を昔は弓張の燈火、けさじ濡さすと、合羽の襟に大雨を凌て急く夜の道、ヤサしく、卒爾ながら

火を一つ御無心と立寄れば、旅人もちやくと身構え、此街道は無用心としつて合點の一人旅見れば飛道具の一口商、茲こそはかさト出なをせと、びくと動ば一討と、眼をくばれば、成程、盜賊とのれ目違ひ御尤千萬、我等は此邊の狩人なるが、先程の大雨にほくちもし免り難義至極、銃砲夫れへれ渡し申、自身に火を付侈借と、他事なき詞顔付きを、きつと眺て、和殿は早野勘平ならずや、さほふ貴殿は千崎彌五郎、是は堅固で、無事でも、絶て久敷き對面に、主人のれ家没落の、胸に忘れぬ無念の思ひ互に、拳を握り合ふ勘平は指うつむき、暫し詞もなかりしが、面目もなき我身の上、古朋輩の貴殿にも、顔も得上ぬ此仕合、武士の冥加に盡たるか、殿判官公の御供先き、れ家の大事れこりしは是非に及ばぬ我不運、其場にも有合せず、侈屋敷へは歸られず、所詮時節を待て侈詫と、思ひの外、の侈切腹なむ三寶、皆師直めがなす業、せめて冤途の侈供と、刀に手はか

けたれど、何を手柄てがらに御供ごともど、どの頬ほさげていひ譯わけせんと心を碎くだく折おか  
 ら、密ひそかに櫛くし子を承うけたはれば、由良殿御親子郷右衛門殿を始はじめとして、故殿こどのの體うら  
 憤ふん散さんせん爲ため、寄りくくの思召立有おもひつかどの噴うけ我等迎むかひも御勘當ごかんやうの身みといふで  
 もなし、手が、り求め由良殿に對面たいめんとげ、涉企くはたての連判れんぱんに涉加くはへ下さらば  
 生なる世よの面目めんもく、貴殿に逢あひも優曇うぜん花けの花を咲さかせて侍さむらいの、一分立いっぴんて給たまはれ  
 かし、古朋輩こほうばいのよしみ武士ぶしの情なさけ、頼申たのますと兩手りょうてをつき、先非せんびを悔くし男泣おと  
 理ことばり、せめて不便びんなる、彌五郎やごろうも朋輩ほうばいの悔道くどう理りと思へ共とも、大事だいじをむさど明  
 さすと、同勘平かんへい、はて扱あつかれ手前は身みの云譯いひわけに取とませて、涉企くはたての連判れんぱんな  
 どとい何なにの謔言たはごと、左様さやうの噴うはかつてなし、某たれは由良殿郷右衛門殿へ急きゆうの  
 使つかひ、先君せんきんの涉廟所せふぶどうへ、涉石碑せきひを建立こんりやうせんどの催もよほえ、併ともし我われも迎むかひも浪人なみのりの身み  
 の上うへ、是こゝを鹽冶判官殿しんじはんくわんの涉石塔せきたうと、末すえの世迄よも人の口くちのはにかゝる物  
 故ゆゑ、涉用金せつようぎんを集あつむる其その涉使せつし、先君せんきんの涉恩せつおんを思おもふ人を撰出せんしゆす爲ため、わざと大事だいじを

#### 五四

明されず、先君の御恩を思ひ、合點かゝり、石碑になどらへ大星の工を餘所にしらせまは、げに朋輩のよしみなり、忝い彌五郎殿、成る程石碑といひ立、御用金の御拵有事、とづくに承はり及び、某も何とぞまて用金を調べ、それを力に御詫と心は千々に碎け共彌五郎殿、耻しや主人の汚罰で今此ざま、誰にかうどの便りもなま、され共かるが親、與市兵衛と申はたのもし、百姓、我々夫婦が判官公へ、不奉公を悔歎に、何とぞして元の武士に立返れど、おぢうば共に歎悲しむ、是幸ひ邊に逢し物語、段々の子細を語り、元の武士に立かへると云聞さば、僅の田地も我子の爲何しに以なへるもいへ、ま、汚用金を手が、りに郷右衛門殿迄取次一入頼存ると餘義なき詞に、成る程、然らば是より郷右衛門殿迄右の譯をも咄ま、由良殿へ願ふて見ん明る日は必急度返事、則ち郷右衛門殿の旅宿の所書と渡せば取て押ま戴き重くの汚世話忝し何とぞ急に

六四

渉用金を拵へ、明々日れ目にか、らん、某が有家に尋あらば、此山崎の渡  
 場を左へ取て、與市兵衛とれ尋有れば、早速相しれ申すべし、夜ふけぬ内  
 に早くも渉出、コレ此行先は猶物騒、随分ぬかるな合點、石碑成就する  
 迄は蚤にもくはさぬ此體は邊も堅固で、渉用金の便りを待つぞ、さらば  
 くと兩方へ立別、られてぞ急ぎ行く、又もふりくる雨の足人の足音とば  
 くと、道は闇路に迷はねど子故の闇につく杖も、すぐ成る心堅親仁一  
 筋道の後から、親仁殿、よい道連と、呼ひつて、斧九太夫が惺定九郎、身  
 の置き所白浪や此街道の夜働、だん平物を落とし指、きつきにあら呼ぶ聲  
 が、貴様の耳へははいらぬか、此物騒な街道を、よい年をして大膽、連  
 れにならふと向ふへ廻り、きよろ付く目玉ぞつとせしが、道は老人、是れ  
 いか若いに似ぬ渉奇特な、私もよい年しをして、一人旅はいやなれ  
 ど、いづくの浦でも金程太切なものはない去年の年貢に詰り、此中か

ら一家中の在所へ無心にいたれば、是もびたひもなにか才覺ならず、婿の  
 明ぬ所に長居のならず、すてく一人戻る道と、半分いひさず、イヤかま  
 しい有様が年貢の納らぬ其相談を聞にこれぬ、コレ親仁殿、おれがいふ事  
 とくと聞しやれや、ア、かうじやい、こなたの懐に金なら四五十兩のかさ、  
 編の財布に有のを、とつくりと見付てきたのじや、借て下され、男が手を  
 合す、定て貴様も何ぞ詰らぬ事か、子が難儀に及ぶによつてといふ様な、  
 有る格な事トやあろけれど、おれが見込だらハテしよことがないぞ諦て  
 借して下され〜と懐へ手を指入引ずり出す編の財布、ア、中夫は、夫は  
 とは、是程爰に有る物と引たくる手に縫り付き、此財布は跡の在所で  
 草鞋買ふ迎、端錢を出しました、跡に残るは晝食の握飯霍乱せん様に  
 と娘がくれた和散反魂丹でござりませぬ、お赦しなされ下さりませと、  
 ひつたくり遊行先きに立廻り、聞分けのない、むごい料理するがいや

さに、手ぬるういへば付上る、其金爰へ持出せ、遅いとたつた一討ちと  
二尺八寸拜打なふ悲しやといふ間もなくから竹わりと切付ける、刀の  
廻りか手の廻りか、はづれる抜き身を兩手にしつかと搦付、どふでもこ  
なた殺さしやるの、知れた事、金の有るのを見てゐる仕事、小言はかず  
とくたばれど、肝先さへ指付れば、待て下さりませ、是非に及ばぬ  
成程、是の金でござります、けれ共此金は、私がたつた一人の娘がこ  
ざる、其娘が命にもかへぬ、大事の男がござりまゐる、其男の爲に入金、ち  
と譯有る事故涙人して居ます、娘が申します、あの人の涙人も元  
いわし故、何ぞぞして元の武士にしてしんぜたいと、隙とわしとへ  
毎夜さ頼み、身貧にはござります、どうもしがくの仕様もなく、ば、  
といろく談合して娘にも呑込せ、聳へは必きたなしとしめし合せ、ほ  
んにく親子三人が血の涙の流れる金、夫を恥前に取られて娘は何と

成りませう、コレ拜たがます助けて下されませ、お前もお侍さむらいの果そふなが、武士  
の相身あひみ互たがひ此金このかねがなければ、娘も聳ひども人様ひとさまに顔が出されぬたつた一人の  
娘に連れ添そよ駕かじや物、不便ふびんにござるかわいふござる了ちゆう簡けんしてお助けな  
ぎれて下さりませ、エ、お前まへのお若わかいによつてまだお子もござるまいが  
やんがてお子こを持もて御ごらうじませ、親仁おんがいひれたつたお尤ゆもじやど、思  
召めいして、此場このばを助けさしやつて下さりませ、一里いちり行いば私わたしが在所しよ金を聳か  
に渡わたしてから殺ころされませよ、中ちゆう々々娘むすめが悦よろこぶ顔かほ見みてから死したうござり  
ませ、コレ中ちゆう々々あれあれ々々と呼ばれお跡あと先まへき遠とほく山彦やまひこの御ごに、哀あはれ催もよほせり、  
悲かなししこつちやは、まつとどこばへ、たひなれ書かめ、其金そのかねでおれが出世しよせすりや、其  
惠めぐみでうぬが悴せがれも出世しよせするはやい、人に慈じ悲ひすりや悪わるるうは報むかはぬ、  
かはいやど、ぐつとつく、うんと手足てあしの七しち顛てん八はち倒たふのたくり廻まわるを脚あしにて  
蹴け返かへし、いとしゃ、いたかろけれおれに恨にくはななぞや、金かねがありやこ

そ殺せ、金がななりや何のいの、金が敵じやいとしばや南無阿彌陀、南無  
 妙法蓮華經めつぽうれんげきやうとちらへ成りとうせれろと、刀もぬかぬ芋いもざしゑぐり、草葉  
 も朱あけに置露や、年も六十四苦八苦あへなく息いきの絶たへにけり、ますましたり  
 と件の財布くたんさいふ、くらがり耳の掴つかみ讀よみ、ヒヤ五十兩、エ、久しぶりの御對面ごたいめん忝かたじけなくしと  
 首くびにひつ、かけ死骸しがいと直ただくに谷底そとへはね込蹴け込む泥どろまぶればねは我身  
 にかゝる、共ともしらず立たたる後うしろ々逸いつ散さんにくる手負猪てひひし是こゝはならぬと身をよ  
 ぎるかけくる猪は一もんじ、木の根岩いほかき角踏かくふみ立てけたて鼻はないからして泥どろ  
 も草木も一ひとまくりりに飛と行いバ、あはやと見送みおくくる定九郎じやうくわうが、背骨せほねをかけて  
 ぞつさりとあばらへ抜ける二つ玉、うん共ともぎやつ共とも以もふ間まなく、ふす布ふ  
 り返りて死たるは心地よくこそ見へにけれ猪打しこうちどめしと勘平かんへいは鎖くわ鉋くわ  
 提ひき爰こゝかまこさぐり廻まわて扱あこそと、引つ立れば猪しにはあらず、マアこりや  
 人じやなむ三寶さんぼう仕損しそんしたりと思へどくらき眞まことの闇誰人やみたれ成りぞと問まれ

もせず、まだ息あらんと抱起せは手に當たる金財布搦で見れば四五十  
兩、天のわたへと押え戴く猪々先きへ一散に飛がとくに急さける

○第六 勘平腹切の段

みさき踊がまゆんだる程に、親仁出て見やばんつ、ばんつれて親仁  
出て見やばんつ、麥かつ音の在郷歌所も名にたふ山崎の小百姓、與市  
兵衛が垣生の住家、今は早野勘平が涙の身の隠れ里、女房かかると寐  
亂し、髪取り上げんと櫛箱の、あかつきかけて戻らぬ夫、待間もどけし投  
げ島田、いふにいれぬ身の上を誰にか、つげの水櫛に、髪の色艶すきか  
へし、品よくしやんと結立てしは、在所に惜き姿なり、母の齡も杖つきの、  
野道とぼく立歸り、娘髪結つたか美しうよう出来た、もふ在所の  
どこもかも麥秋時分でいそがしい、今も數際で若い衆が麥かり歌に、親  
仁出て見やばんつれてと唄ふを聞き親父殿の遅いが氣にかゝり、在

郷迄いたれどよなふ影も形も見へぬ、イヤこりやまあどふして遅以事  
 じや、わし一走見て來やんしよ、イヤなふ若い女の一人りあるくはいらぬ  
 事、殊にうなたはちいさい時から、在所をあるく事さへ嫌ひで、鹽冶様へ  
 御奉公にやつたれど、どふでも草深い所に縁が有やら戻りやつたが、勘  
 平殿と二人り居やればねどましい顔も出ぬ、か、様のそりや知れた  
 事、ずいた男と添のじや物在所はねるか貧しい暮しでも苦にならぬ、や  
 んがて盆に成つてど様出て見やか、んつか、んつれてどいふ歌の通  
 り、勘平殿とたつた二人り踊見にいきやんしよ、ね前も若い時覺があら  
 ど指合くらぬぐはら娘、氣もわさくと見へにける、何ほ其様に面白  
 かしういやつても、心の中への、いへく濟でござんす主の爲に祇園町へ、勤  
 奉公に行くは兼て覺悟のまへなれど、年寄つてど、様の世話やかまや  
 んすがそりやいやんな少身者なれど兄も鹽冶様の御家來なれば、外の

世話する様にもないと、親子咄しの中道傳ひ、駕かをか、せて急きくるは  
 祇園町ぎげんの一文字や、爰しやくと門口から、與市兵衛殿内にかと云つ、  
 はいれば、是こゝは、遠とほい所を、ソレ娘たぼこぼん益ぼん茶上げましやと親子して、  
 榎つちでこれへを始人はくやの亭主ていしゆ扱あ夕ゆべは是の親父殿もいかる太義別條べつじょうな  
 う戻られまししたか、エ、扱あは親仁殿と連れ立つて來はなされませぬか、是  
 はしたり、お前へいてから今にこれいて、戻かへられぬか、ハテめんよふな、若もし  
 稻荷前いなりをぶら付いて彼玉殿かのにつま、りやせぬかの、コレ中爰へ見にき  
 て極きはめた通り、お娘の年も丸五年切ねん、給銀きゆうぎんは金百兩、さとりと手を打た、是の  
 親仁がいはるゝには、今夜中に渡さねばならぬ金有れば、今晚こんばん證文しやうもんを認  
 め、百兩の金子かねお借かなされて下されど、涙をこぼえての頼み故、證文の上  
 で半金渡し、残りのこりは奉公人と引替ひきかの契約けいやく、向が其五十兩渡すと悦いたんで戴たま、  
 はた〜いふて戻られたのもふ四ッでも有ふかい、夜道を一人ひとり金持かねもちて

四五

いかぬ物ど留ても聞ず戻られたが、但しは道に、イェく寄しやる所はなふ  
 か、様、ない共、殊に一時も早うそなたやわしに金見せて、悦ばさふ  
 迎いきせきと戻らしやる筈じやに合點がいかぬ、イこれ合點のいくい  
 かぬはそつちの穿鑿、せんさくこちはのこりの金渡して、奉公人連れていのだ、懷  
 か金取出し跡金の五十兩、是で都合百兩、ツガウ渡す受け取しやれ、サア前夫れ  
 でも親仁殿の戻られぬ中はなふ、かる、わがみはやうれぬ、ハチぐずぐずと  
 婿の明ぬ、コレぐつ共すつ共にはれぬ、與市兵衛の印形、証文が物いふ、けふ  
 から金で買切た體、からた一日違へばれ、宛違ふ、まちがどふでかふせざ、濟まはと手  
 を取て引立る、マアく待てと取り付母親突退はね退け無躰に駕へ押し込  
 み、かき昇上る門ぞの口、銃鉋に袋笠打かけ戻りかゝつて見る勘平、つか  
 く、と内に入り、駕の内なは女房共こりや、マアこへ、マア勘平殿よい所へ  
 よう戻つて下さつたど、母の悦び其意を得ず、アどうでも深い譯がある、母

者人女房共様子聞ふとれいへの真中、どつかとずわれれば文字の亭主ていしゆ扱はこなたが奉公人の御主ごしゆじやの、譬夫たとへでも何でも、号の夫なづけなど、脇か違亂ちがひ妨さまたげ申者無之候と、親仁の印形有からはこちに構かまぬ、早う奉公人を受け取ふ、鴛殿合點が行まい、兼てこなたに金の入る様子娘の咄しで聞た故、どふぞ調へて進しんせたいと、いふた斗りで一錢の宛あてもなし、そこで親父殿の、いはしやるに、ひよつとこなたの氣に女房賣うて金調とよると、よもや思ふて、いは有まぬけれど若し二親ふたおやの手前まへを遠慮えんりよして居やしやるまい物でもない、以つそ此與市兵衛が鴛殿にしらさず娘を賣ふ、まさかの時は切取するも侍のならひ、女房賣つても耻にはならぬ、お主の役やくに立たる金、調へておましたらまんざら腹も立まいと、きのふから祇園町たへおり極めにいて今に戻らしやれぬ故、親子案じて居る中へ親方殿が見へて、夕べ親仁殿に、半金渡し、跡金の五十兩を引きかへに、娘を連

れていふといふてなれど、親仁殿に逢ての上と譯をいふても聞入れ  
 ず、今連れていなしやる所どふせうぞ勘平殿、是は先づ以て眞殿の  
 心づかひ忝ひ、したがおちにもちつとよい事があれ共夫れは追つて親  
 父殿も戻られぬに女房共は渡されまい、どはなせに、ハテいハ親也判か  
 り、尤夕べ半金の五十兩渡されたでも有ふけれど、これ京大坂を俣  
 につけ、女護島程奉公人を拘る一文字屋渡さぬ金を渡したといふて濟  
 物かいの、まだ其上に慥な事が有てや、是の親仁が彼五十兩といふ金を、  
 手拭ひにぐるぐると巻ひて懐に入らる、そりやあぶなは是に入て首  
 につかけさつしやれど、それがきて居る此一重物の嶋のきれで拵へた金  
 財布借たれば、やんがて首にかけて戻られう、何と、こなたが着て居る  
 此島の切れの金財布か、ア、ア、あの此嶋でや、何んぞ慥な證據で有ふが、  
 聞ふはつと勘平が肝先きにひしどこたへ、傍邊に目と配袂の財布見合

七五

せば、寸分違わぬ糸入嶋なむ三寶、扱は夕べ鑊てつぱうで打殺したは舅しゅうとで有たか、はつと我が胸板を二ツ玉で打ぬかる、よりせつなき思ひ、どはしらずして女房コレ、こちの人そはくせずと、やる物かやらぬ物か、分別して下さんせ、成程、もふあの様に慥たしかにいゐる、かろはいきやらずば成るまいか、とつ様に逢あはいでもかへ、親父殿にもけさちよつと逢たが戻りは知れまい、フッそんなりやとつ様に逢てかへ、夫ならそふと云ひもせでか、様にもわしにも、案じさしてばつかりといふに文字も圖に乗つて、七度尋て人疑へじや、親仁の有所の知れたのでそつちもこつちも心がよ、まだ此上にも四の五の有ればいや共にでんぞさた、さうさらりと濟すんでめでたい、お袋も御亭も六條参りしてちと寄しやれ、駕かに早うのりや、これ勘平殿もふ今あつちへ行ぞへ、年寄た二人の親達とふでこな様の皆な世話、取わけてとつ様いきつい持病氣を付け

て下さんせと、親の死目を露しらず、頼むふびんさいぢらしき、いつそ打  
 明け有の儘、咄さんにも他人有と心を、以ためてたへ居る、詞、鴛殿夫婦の  
 別れ暇乞がしたかろけれど、そなたに未練な氣も出よかと思ふての事  
 である、イエくなんぼ別れても、ぬしの爲に身を賣れば悲まうも何共ない、  
 且しや勇んで行くか、様したがと、様に逢ずに行のが、夫れも戻ら  
 しやつたらつる逢にいかしやろぞいの煩はぬ様に灸すへて息才な顔  
 見せにきてたも、鼻紙扇もなけりや不自由な、何にもよいか、とばついで  
 怪我仕やんなど、駕に乗る迄心を付けさらばや、さらば、何の因果で人並  
 な娘を持ち此悲しいめを見る事ぞやと、齒を喰しぱり泣ければ娘は駕  
 にしがみ付き、泣をまらさじ、聞きじと聲をも、立ずむせかへる、情なくも  
 駕かき昇上り道をはやめて急ぎ行、母は跡を見送りく、く、よしない事いふ  
 て娘よ嘸悲しかろ、詞、こな人且いの、親の身でさへ思ひ切がよいに、女房



やる筈はず、こなた道で逢た時、金受け取はさつしやれぬか、親父殿が何とい  
 入れた、サア、いんつしやれ、サア、何だ、さふも返事は有まぬかの、なほ證據しやうこは、コレ  
 爰よここにも勘平かんへいが懐へ手を指入れて引き出すは、さつきにちらりと見て置  
 た此財布さいふ、コレ血ちの付いて有るからは、こなたが親父を殺したの、イヤ夫れい、  
 夫れはどの、エ、わごりよはなふ、隠しても隠されぬ天道たう様が明きらかな  
 親父殿を殺して取はたその金かにや誰れにやる金じや、聞へた、身貧ひんな  
 舅娘しゅうとを賣つた其金を、中で半分くすねて置いて、皆やるまいかと思ふて、  
 コリヤ殺して取つたのじやな、今といふ今迄も、律義りてぎな人じやと思ふて、欺だまさ  
 れたが腹が立つはいやい、エ、爰な人でなし、あんまり諺あやめて涙さへ出ぬは  
 いやい、なふゆとエや與市兵衛殿、畜生ちくじやうの様な變まといしらず、さふぞ元と  
 の侍にしてやりたいと、年し寄つて夜もねずに京三界けいがいをかけあるき、珍ちん  
 財さいを投げ打て世話せわさしやつたも、却かへてこなたの身の怨あだと成たるか飼飼か

ふ犬に手をくひるゝど、ようもくく此様にむごたうしう殺された事じ  
 や迄、コリヤ愛な鬼たによ蛇じやよ、どさまをかへせ、親父殿を生けて戻せやいと、遠慮えんりよ  
 會釋あしやくもあら男の鬘たなまを掴つかんで引き寄せくく擲たきまつけ付つけづだくく切さいなんだ  
 迎是むかひで何の腹がるよど、恨の數くくどき立かつばとふして、泣居たる、身  
 の誤あやまりに勘平も、五體たいに熱湯ねつとうの汗あせを流ながし、疊たぐみに喰くひ付き天罰てんばつと思ひ知つた  
 る折こそ有れ、深編笠ふかあみがさの侍二人早野勘平在宿ざいしゆくをしめさるか、原郷右衛門  
 千崎彌五郎御意い得たしと音なへば折悪けれ共勘平の腰ふさぎ、脇狭わきびせんで  
 出迎むかひ、御ご兩所共ごらうに、見苦しき垣生あはらちへ御出忝ごしづかしと、頭をさぐれば郷右  
 衛門、見れば家内に取込とり込こみも有そ、うな、イヤもふ瑣細ささいな内證ないしやう事を構かまひなく共い  
 ざ先つあれへ然さば左様さように致いたさんとすつと通り座につけば二人が前に  
 兩手をつき、此度殿このたびの御大事ごだいじに外はずれたるの拙者せつしやが重おろの誤あやまり中ちゆうひらか  
 ん詞ことばもなし何卒なにとぞ某たがが科御赦ごゆるしを蒙あうむり亡君むらうくんの御年忌ごねんき諸家中諸共相勤つとむる

## 二六

様に御兩所の御執成偏どりせしひとへに頼奉ると身をへり下り述べれば、郷右衛門取  
 わへず、先つつ以て其方貯たくはへなき浪人の身として、多くの金子御石碑料せきひちちに調  
 進しんせられし段由良助殿甚はなはだかんじ入れしが石碑いそなむを營いそなむひ亡君の御菩提ぼだい、殿  
 に不忠不義をせし其方の金子を以つて御石碑料せきひちちに用もちひられんは御尊そん  
 靈れいの御心にも吐ふまじと有つて、金子の封ふうの儘相戻まさると、詞の中ちか  
 彌五郎懷くわい中ちゆうの金取出し、勘平が前に指置けば、はつと斗りに氣も轉動てんどう母  
 の涙と諸共に調、爰こゝな悪人づら、今といふ今親の罰思ばちひ知つたか、皆様も  
 聞いて下され、親父殿が年寄つて後生ごせきやうの事ことの思おもはず、聲こゑの爲に娘を賣り、  
 金調とくのへて戻らざるを待ちふせして、あの様に殺えて取つた金じや物、  
 天道様てんどうがなくば知らず、なんで御用に立つ物ぞ親殺しのいき盗人ばちに、罰  
 を當て下されぬ、神や佛けも聞へぬ、あの不孝者かうれまへ方の手にか  
 けて、なぶり殺しにして下され、わしや腹が立ついのど身を投、ふして泣

居たる、聞に驚き兩人刀追つ取、弓手馬手に詰かけ、彌五郎聲をわら  
 び、勘平、非義非道の金取つて、身の科の詫せよとは云ぬぞよ、われが  
 やうな人非人武士の道ハ耳に入まい、親同然の鼻を殺し金を盗んだ重  
 罪人は、大身鎗の田樂ざし、拙者が手料理ふるまいんとはつたとにらめ  
 ば郷右衛門、濁しても盜泉の水を吞ずどハ義者のいましめ、鼻を殺し取  
 たる金、亡君の御用金に成るべきか、生得汝が不忠不義の根性にて調へ  
 たる金と推察有て、つき戻されたる由良助の眼力天晴く、去ながら、ハテ  
 情なきは此事世上に流布有つて、鹽治判官の家來早野勘平、非義非道を  
 行ひしといはゞ、汝斗りが恥ならず、亡君の御恥辱としらざるの、腔者、左  
 程の事の辨へなき汝にてハなかりしがいかなる天魔が見入れしと、す  
 るどき眼に涙をうかめ事を分け理をせむれば、たまり兼て勘平、諸肌押  
 しぬぎ脇指を、抜より早く腹にぐつと突立て、いつれもの手前面目も

四六

なき仕合、拙者が望み叶はぬ時の切腹と兼ての覺悟我身を殺せし事亡  
 君の御耻辱とあれば一通り申ひらるん、兩人共に聞てたべ、夜前彌五郎  
 殿の御目にかゝり、別れて歸るくら紛れ山越猪に出合、二ツ玉にて打留、  
 かけ寄つてさぐり見れば、猪にはあらで旅人、なむ三寶過たり、藥はなき  
 かど懷中をさがし見れば、財布に入たる此金、道ならぬ事なれども天か  
 我にわたふる金と、直くにはせ行彌五郎殿に彼金を渡し、立歸つて様子  
 を聞けば、打ち留めたるの、我が眞金の女房を賣つた金かほど迄する事  
 なす事、鶺鴒の紫程違ふといふも武運に盡たる勘平が、身の成り行推量有  
 れど血走る眼に無念の涙子細と聞より、彌五郎ずんと立上り、死骸引上  
 げ打返し、と疵口改め、郷右衛門殿は見られよ、鎧砲疵に似たれ共、是  
 の刀でまぐつた疵、エ、勘平早まりしと、いふに手負も見て、悔り、母も驚く  
 事なり也、郷右衛門心付、千崎殿、是にて思ひ當つたり、御自分も見られ

五六

し通り、是へ来る道端はたに、銃砲受けたる旅人の死骸しがい、立寄り見れば斧定九郎こうたく、強欲かうよくな親九太夫さへ、見限みかきつて勘當かんきやうしたる悪黨あくどう者、身のイなき故に、山賊ざくすると聞たるが疑ぎひもなく勘平が、舅を討たはきやつが業わざ、そんなりや、あの親父殿を殺したは、外の者でござりませうかへ、アはつと、母は手負たひに絶たがり、コ調手を合して拜たがまず、年寄りの愚痴ぐぢな心から恨うらみいふたは皆誤あやまり、こらへて下され勘平殿、必死んで下さるなど、泣詫なみれば顔ふり上調、只今母の疑ぎひも、我悪名われはれも晴はれたれば是を、冥途めいじゆの思おもひ出とし、跡あとを追おつ付き舅殿、死出三途さんづを伴ともはんと、突込つぎ刀引き廻ませば、暫あくく、思おもはずも其方が舅の敵討てきうちつたるは、いまだ武運ぶうんに盡つきざる所、弓矢神の御惠めぐみにて、一いち効立かうたたる勘平、息いきの有中あるうち郷右衛門ごうゑもんが密ひそに見する物有と、懐中くわいじゆうの一巻いっまきを取とり出し、さらくど押しひらき、此度このたび亡君の敵高師直たかしのりちかを討ち取らんと神文を取とりはま、一味徒黨いまいどうの連判れんぱんかくのとしど、讀よみ終はらず苦痛くるしみの勘平其姓名せいめいは誰

誰成ぞや、徒黨の人数は四十五人汝か心底見届たれば、其方を指加へ  
 一味の義士四十六人、是を冥途の土産にせよと、懐中の矢立取出し姓名  
 を書き記、勘平血判心得たりと腹十文字にかき切、臟腑を搦でしつかと  
 押し、血判仕つた、忝けなや、有がたや我望達したり、母人歎いて下さ  
 るな、眞の最期も、女房の奉公も、反古にはならぬ此金一味徒黨の御用金  
 と、いふに母も涙なから、財布と俱に二包二人が前に指出し、勘平殿の魂  
 の入た此財布、聲殿じやと思ふて、敵討の御供に連れてござつて下さり  
 ませ、成程尤也と郷右衛門金取納め、思へば、此金は島の財布の紫  
 摩黄金佛果を得よと云ければ、佛果とは穢らはし死なぬ、魂魄此  
 土にぞ、まつて、敵討の御供すると言聲も早や四苦八苦、母は涙にかき  
 くれながら、勘平殿、此事を娘にまらしせめて死目に逢えてやりたい  
 親のさしご、格別勘平が死だ事必しらして下さるな、お主の爲に

七六

賣たる女房、此事聞て不奉公せば、お主に不忠するも同然、只其儘に指置かれよ、サア思ひ置事なしと刀の鋒はつさき咽のどにくつと指貫さしつらぬきかつばとふして息絶たぐたり、アアもふ聳殿は死なしやつたか、扱もく世の中にたれが様な因果ぐあな者が又と一人り有ふか、親父殿は死なしやる頼に思ふ聳を先き立て、アアしかはいの娘には生き別れ、年寄つた此母が一人り残つた是がア何んど生きて居られふぞ、コレ親父殿與市兵衛殿、たれも一所に連れて以て下されど、取付いては泣さけび、又立上りて、コレ聳殿、母も俱ともにぞ絶たぐ付ては伏沈ふしつむ、あちらでは泣こちらで泣わつと斗たうにぞふと伏聲ふしをはかりに歎なげきしは目も當られぬ次第なり、鄰右衛門つ、立上り、アアこれく老母、歎かる、ハ理ことばりなれ共、勘平がさほどの様子、大星殿に委まかし語り、入金手渡しせぬ満足まんぞくあらん、首にかけたる此金は、聳と舅しやうとの七七日、四十九日や五十兩、合せて百兩百ケ日の、追善ついでん供養くやう跡あと懇こんに吊たがひはれよさらばく

れさらばと見送る涙見返る涙涙の涙の立返る人もはかなき

○第七 茶屋場

花に遊ば、祇園あたりの色揃へ、東方南方北方西方みだの淨土かぬりに塗立てびつかりびか、光りか、やくはくや藝子にいかなす、現ぬかして、ぐさんさろつくさろつくや、誰頼亭主の居ぬか亭主、是はいそがしいは、さいつ様じや、さなた様じや、斧九太様御案内どはけうとい、初めのれ方を同道申した、きつう取り込みそふに見へるが、一ト上げます座敷が有か、ござります共、今晚は役由良大盡の御趣向で、名有る色達を撰込、下座敷はふさがけてござりますれど、亭座敷が明いて、ござります、そりや又蜘蛛の巣だらけて有ふ、又悪る口をイヤ、よい年をして、女郎の蜘蛛の巣にか、らまい用心、コロヤきついには、下に置かれぬ二階座敷、灯をともせ中居共、れ盃れたげこ盆と、高い調子にか

九六

せかけて奥の騒さわぎの太鼓三味ナント伴内殿由良助が体御ていごらうじたか、九太夫殿、ありやいつそ氣違ちがひひでござる、段々貴様方御内通有ても、あれ程に有ふとは、主人師直も存せず、拙者に罷り登のぼりて見居け、心得ぬ事あらば早速にしらせよと申付けましたが、扱あつかいもへんしも折ましてござる、障力せきり彌めは何と致したな、こいつも折節此所へ参り俱ともに放はなつ指合さしあひぬがふしぎ一トつ、今晚ほんばんは底そこの底を捜さがし見んと、心工たくみを致して参つた、密みつに叱しし申そふ、いざ二階かいへ、先々、然らばあうに出でじつに心に、思ひいせいで、あだなはれたく、の口先くちばしいかる、つやでい有あいな彌彌五郎殿、喜多八殿、是が由良助殿の遊び茶屋、一力と申すのでござる、コレサ平右衛門よい時分に呼出そふ勝手に扣ひかて居かやれ、畏かしこまりました、宜よろしう頼上たのます、誰れ、どちよと頼たのまい、アイ、くどな様さんじやへ、イヤ、我われの由良殿に用事有つて参つた、奥へいては、いふには、矢間やま十太郎、千崎彌五郎、竹森喜多八でござ

る、此間を節々迎への人を遣はますれ共、お歸りのな以故、三人連れて  
 参りました、ちど御相談申さねばならぬ儀がござる程に、お逢なされて  
 下されど、急度申してくれ、夫れは何ん共氣の毒でござんす、由良様は三  
 日以來呑み續け逢なされてからたゝゝ有るまい、本性はないぞへ、ハッ  
 扱まわそふいふておくりやれ、アイ、彌五郎殿お聞なされたか、承はつて  
 驚き入りました、初めの程の敵へ聞する計略と存じましたが、いかふ遊  
 びに實が入り過ぎまして、合點が参らぬ何と此喜多八が申した通り魂  
 が入れかはつてござるふがの、いつそ一間へふん込と、とくと面談  
 致した上、成る程、然らば是に待ちませふ、手の鳴方へ、く、く、とらまよ、  
 く、由良おにやまたい、とらまへて酒呑そ、く、コリヤとらまへたは、サァ  
 酒を銚子持て、由良助殿矢間十太郎でござるこりや何んとなき  
 る、なむ三寶仕舞た、チ、氣の毒何と榮さん、ふしくた様なお侍様方、お連

様かいなさわれれば、お三人共こは以顔して、イヤレ女郎達ち、我々は大星殿  
に用事有つて参つた、暫く座を立つて貰といそんな事で有そな物、由良  
様ん奥へ行ぞへお前も早うお出、皆様ん是にへ、由良助殿矢間十太郎で  
ござる、竹森喜多入でござる、千崎彌五郎御意得に参つと、お目覺きれま  
せう、是は打揃ふてよふお出なされた、何んと思ふて、鎌倉へ打立つ時候  
はいつ頃でござるな、されば、こそ、大事の事をお尋なれ、丹波與作が歌に  
江戸三界へ以かんして、御免候へたはい、酒の酔本性違はず、  
性根が付かざれば三人が、酒の酔を醒さしませうかな、聊爾なされませ、  
るな、憚りながら平右衛門めが、一言中上げた以義がござりませ、暫くお  
扣下されませう、由良助様、寺岡平右衛門免でござりませ、御機嫌の体を  
拜しまして、いか斗り大悦に存奉ります、寺岡平右衛門とは、何んでは  
すか、前かお北國へお飛脚にいかれた、足のかるい足輕殿か、左様でござ

ります、殿様の御切腹を北國にて承はりましたしてなむ三寶と宙を飛で歸  
 りまする道にて、お家も召し上られ一家中ちりくくと承つた時の無念  
 さ奉公こそ足輕なれ、御恩はかはらぬお主の怨師直めを一つ討と鎌倉へ  
 立越へ三ヶ月が間非人と成つて付け狙ひましたれ共、敵は用心嚴しく  
 近寄事も叶ひませず、所詮腹かつさばかんと存しましたが、國元の親の  
 事を思ひ出ましまして、ずくく歸りました所に天道様のお知らせにや  
 へづれも様方の一味連判の様子承はりますると、嬉々や有がさやと  
 取る物も取あへずあなた方の旅宿を尋、一向に頼申上ましたれば、出か  
 したういやつとや、お頭へ願ふてやるとお詞にすぎり、是迄推參仕りま  
 した師直屋敷の、これくく其元とは足がるではなふて、大きな口  
 がるじやの何と牽頭持なされぬか、尤わたくしも蚤の頭を斧でわつた  
 程、無念な共存じて、四五十人一味を拵へて見たが、あぢな事、よう思ふ

て見れば仕損しそんしたら此方の首くびがこるり、仕負しおせたら跡あとで切腹せきはら、どちら、でも死しなねばなうぬ、といふは人參じんじん呑のんて首くびく、る様な物もの、殊ことに其元そのもとは五兩ごりょうに三人扶持さんしほの足輕あしかに腹はらの立たられな、はつち坊主ぼくしゆの報謝ほうしゃ米程まいぢやう取とつて居ゐて、命いのちを捨て敵討てきうちせうとはそりや青あおのり賞ちやうふた禮らいに、太たく神樂かぐらを打うつ様な物もの、我等われら知行ちやうぢやう千五百石せんごひやくしやく、貴様あなたとくらべると敵てきの首くびを斗と舂まではかる程ぢやう取とつても釣合つりあぬく、所ところでやめた、聞きへたか兎角とがく浮世うきよはかうした物ものじや、つ、てんくくくぞな、と引ひつかけた所ところはたまらぬく、是こゝの由良助ゆりすけ様のやうのお詞ことば共とも覺おぼませぬ、僅わずか三人扶持さんしほ取拙とつち者もの免まぬでも、千五百石せんごひやくしやくの御自分おのれ様やうでも繫つなました命いのちは一いッ、御恩おんに高下たかひはござりませぬ、押おすに押おされぬは家いへの筋目すぢめ殿だんの御名代おのなしろもなされませぬ、歴れき々々様方やうの中なかへ、見みるかげもない私わたしめが指さし加くへてお願ねがひ申ますは、憚はにかり共とも慮り外がわ共とも、ほんの猿さるが人真まね似に草履くさぢを搦つかんで成な共とも、お荷物にものつをかづいて成なり共ともさんじませう、お供ともに召まし連つれられて、申まし

こ申し、是はしたり寝てござるそふな、コレ平右衛門あつたら口に風  
 ひかすま、由良助は死人も同然、矢間殿千崎殿、本心は見へましたか、  
 申合せた通り計ひませうか、いか様、一味連判の者共への見せし免、ござ  
 いづれもと立寄るを、ししばらくと平右衛門押しなだ免傍に寄り、つく  
 く、思ひ廻しますれば主君に別れなされてより、怨を報はんと様々  
 の艱難木にも萱にも心を置き、人の讒無念をば、じつとこたへてござる  
 からば酒でもむりに参らずば、是迄命も續きますまい醒ての上の御分  
 別と無理に押さへて三人を、伴ふ一間は善悪の、明かりを照す障子の内  
 かげを隠すや、「月の入、山科は一里半息を切たる嫡子力彌、内をすかし  
 て正体なき父が寝姿、起すも人の耳近しと枕元に立寄つて響にかはる  
 刀の鏗音、鯉口ちやんと打ち鳴せば、むつくと起て、力彌か、こは口の音  
 響せしは急用有つてか密に、只今御臺かほよ様も急の飛脚密車

の御狀ほかに御口上りなかつたか、敵高師直歸國の願ひ叶ひ、近々本國  
 へ罷歸る委細の義に文どの御口上、よまゝ、其方の宿へ歸り、夜の内に  
 迎ひの駕いけく、はつとためらふ隙もなく山科さして引返す、先づ  
 様子氣遣ひと狀の封じを切所へ、大星殿、由良殿、斧九太夫でござる、御意  
 得ませふと聲かけられ、是は久しや、一年も逢ぬ内、寄たぞや、頼  
 に其皺のばしににれ出か、爰な越破免が、由良殿、大功の細瑾を願はずと  
 申すが、人の譏も構はず遊里の遊び大功を立つる基適の大丈夫末頼も  
 しろ存る、是は堅いはく、石火矢と出かけた、去りどてにれかれい、イヤ  
 由良助殿とぼけまい、誠貴殿の放埒の敵を討つ術と見へるか、れんでも  
 ない事、忝い四十に餘つて色狂ひ、馬鹿者よ、氣違よと、笑はれふかと思ふ  
 たに、敵を討つ術ととは九太夫殿、嬉しい、其元は、主人鹽冶の怨  
 を報ずる所存はないか、けもない事、家國を渡す折のら、城を枕に討

死といふたの、御臺様への、追従時に貴様が上へ對して朝敵同然と、其  
 場をついと立つた、我等の跡にと、まやちばつて居た、いかるたわけの、所  
 で仕廻いの付かず、御墓へ參つて切腹と、裏門からこそくく、今此安樂  
 なたのしみするも貴殿の恥かぢ、昔のよしみの忘れぬく、堅みをやめ  
 て碎れれく、いか様此九太夫も、昔思へば信太の狐、ばけ顯ひして一献  
 くもふか、由良殿、久しぶりだれ盃、又頂戴と會所めくのか、さしられ吞  
 むひ、吞みられさすは、てうと受けられ肴をするはと傍に有合ふ鯛肴、ば  
 さんですつと指出せり、手を出して、足を戴く鯛肴忝いと戴いて喰んと  
 する、手をつつととらへ、由良助殿、明日は主君鹽治判官の御命日、取分  
 け逮夜が太切と申すが、見と其肴貴殿はくふか、たべるく、但主君鹽治  
 殿が、鯛になられたといふ便宜が有たか、愚痴な人では有るこなたや恥  
 れが涙人したは、判官殿が無分別から、スリヤ恨こそ有れ精進する氣微塵も



と答へず、コ、ふしぎと駕の簾を引き明けければ、内に手ごろの庭の飛石、  
コリヤどふじや九太夫は松浦さよ姫をやられたと見廻すこなたの椽の下  
 を、コレく伴内殿、九太夫がかごぬけの計略、最前力彌が持参せし書翰が  
 心元となし、様子見屈跡をえらぎん、やはり我等が歸る躰にて貴殿の其  
 駕にひつ添て、合點く、と黙頭合、駕には人の有る躰に見せてしづく  
 立歸る、折りに二階へ勘平が妻のねかるの醉さまし、いや里なれて吹風  
 に、うさをはらして居る所へ、ちよといてくる由良助共有ふ侍が、大事の  
 刀を忘れて置た、つゐ取てくる其間かけ物もかけ直し爐の炭もつい  
 でねきや、それくくこちらの三味線ふまねるまいぞ、是のしたり、九  
 太のいなれとそふな、父よ母よと泣聲聞けば、妻に鸚鵡の、うつせし言の  
 葉、エ、何じやいなれかしやんせ、あたり見廻し由良助、釣燈籠のあかりを  
 てらし讀長文は御臺の敵の様子こまくと、女の文の跡やさき、さう、

ではかどらず、よその戀よどうらやましく恥かるは上を見れるせど、夜  
 目遠目とほなり字性ひじやうも恥ぼる思ひ付いたるのべ鏡かぐみ出して寫うつして讀取よみる文  
 章しやう下た家よりは九太夫が、くりとろと文月かげに、すかし讀むどは、神な  
 りずほどけか、りし恥かるが、玉笄かんざしはつたり落れば、下にははつど見上  
 げて後うしろへ隠す文、椽えんの下には猶なほえつば、上には鏡かぐみのかげ隠し、由良よしさんか  
 恥かるか、そもじはそこに何してぞ、わたしや恥まへにもりつぶされ、あ  
 んまりつらさに酔よさまし、風かぜにふかれて居るはいな、へなふ、よう風かぜにふ  
 かれてじやの、イかる、ちど咄はなしたい事が有る、屋根越の天の川で爰こゝから  
 いいはれぬ、ちよつどたりてたもらぬか、咄はなしといとは頼たのみたい事かへ、ま  
 あそんな物、廻まわつて來きやんしよ、以もや、段だん梯子はしへ恥りたらば仲居が見  
 付けて酒にせう、どふせうな、幸さいい爰こゝに九ツ梯子、是をふまえて恥  
 りてたもど、小屋根こやねにかければ、此こゝ梯子はしは勝かちッ手が違ちがふて、こは、どふや

ら是はあふない物、大事ないく、あふないこはいは昔の事、三間づ、ま  
 たげても、赤膏藥かうやくもいらぬ年ば、あほういはんすな、舟にのつた様でこ  
 はい日いな、道理で舟玉様が見へる、のぞかんすないな、洞庭とうていの秋の月  
 櫂をれがみ奉つるトや、イヤモッそんなら下りやせぬぞ、れりざれろしてや  
 ろ、又惡以事を、やかまゑい生娘きむすめかなんどのやうに逆縁さか縁ながらと後方うしろ  
 じつと抱しめ抱れろし、なんとそもじは御らうぞたか、いゝ、え、見たで  
 ありく、アイなんじややら面白おもしろそふな文、あの上から皆讀みなよみだか、くどア  
 身の上の大事とこそは成りにけり、何の事じやぞいな何の事とはれか  
 る古いが惚ほれた、女房に成つてたもらぬか、れかんせうそじや、うそから  
 出た真まことでなければ根がどげぬ、れふといやく、いふまい、なせ、れ前の  
 はうそから出た真まことじやない、實まことから出た嘘うそじやれかる受け出せう、エ、う  
 そでない證據しやうこに今宵このよひの内に身受けせう、ムッ、わしには、間夫まふが有なら

添してやろ、そりや、ほんのへ、侍冥理、三日成り共圍ふたらそれからは、  
 勝手次第、へ、嬉しうござんすといはして置いてわらをでの、いや直に  
 亭主に金渡し今の間に婿さそふ氣遣せずと待つてゐや、そんなら必待  
 て居るぞへ、金渡ししてくる間、どつちへもいきやるな、女房じやろ、夫れも  
 たつた三日、それ合點、忝ふござんす、世にも因果な者ならわしが、身じや、  
 かい男に、いくせの思ひ、エ、なんじやいな、恥かしやんせ、忍びねになく  
 さよちどり、奥でうとふも身の上と恥かるの思案取りの、折に出合  
 ふ平右衛門、妹でないか、キア、兄様か、耻しい所で逢ましたと顔を隠せば苦  
 しうな、關東方戻りがけ、母人に逢てく、いしく聞た、夫どの爲に主の爲、  
 よく賣れたでかした、そふ思ふて下さんすりやわしや嬉しい、また  
 がまわ悦んで下さんせ、思ひがけなう今宵受け出さる、筈、夫れの重疊、  
 何人の世話で、お前も御存の大星由良助様の世話で、何んじや由良

助殿に受け出される。夫の下地からの馴染か、何んのいな、此中を二三度酒の相手夫が有らば添してやる隙がほしく隙やろと結構過ぎた身請、扱ひ其方を早野勘平が女房と、イエしらずじやぞへ、親夫の耻なれば、明かして何の云ませう、ムッそりや本心放埒者、家主の怨を報ずる所存のないに極つたな、イエこれ兄様、有るぞへ、高うはいどれぬ、コレかふくどさ、やけば、すりや其文を髓に見たな、残らず讀だ其跡で、互に見合す顔と顔、それからじやらつき出してつる身請の相談、其文残らず讀だ跡で、それで聞へた、妹とても遁れぬ、命身共にくれよと抜き打にはつしと切れば、ちやつと飛のき、兄様わしに何誤り、勘平といふ夫も有る、急度二た親有るからいな、この様な儘にも成るまい、請出されて親夫に、逢ふと思ふがわえやたのしみ、どんな事でも誤らふ、赦して下んせ、赦えてと、手を合すれば、平右衛門、ぬき身を捨てどうとふしひたんの。

涙にくれけるが、可愛や妹何にもしらぬな、親與市兵衛殿は六月廿九日の夜、人に切られて、成果なされた、それにはまわ、まだ悔りすな、請出され添ふと思ふ、勘平も、腹切て死だはや、それはまわほんのいの、このふくと取り付いてわつと斗りに泣沈む、道理く、様子咄せばながい事、おいたはしは母者人、云出しては泣、思ひ出しては泣娘かるとに聞いたら泣死するであろ、必いふてくれなどの頼み、いふまはと思へ共、逆も遁れぬそちが命、其譯は忠義一途に凝かたまつた由良助殿、勘平が女房と知らねば請出さず、義理もなし元來色には猶ふけらず、見られた狀が一大事請出し差殺さず、思案の底と慥に見へた、よしそふなうても壁に耳、外方洩ても其方が科密書を覗見たるが誤り殺さばならず、人手にかきよより我が手につけて、大事を知つたる女、妹とて赦されずと、夫れを功に連判の數に入れて、供に立たん、小身者の悲しきは人に勝れた

心底を見せねば數には入られぬ、聞分けて命をくれ死でくれ妹と、事  
 分たる兄の詞、恥かるは始終せき上げく、便りのないは身の代を、役に  
 立ての旅立か、暇乞にも見へそな物と、恨でばかりやりました、勿躰ない  
 がど、標は非業の死でも恥年の上、勘平殿は三十に成やならず死る  
 のは嘸悲しかろ口惜かろ、逢たかつたで有ふのになせ逢せては下さん  
 せぬ親夫の精進さへ知らぬは私しが身の因果、何んの生きてやりませ  
 う、恥手にか、らば驕様が恥前を恥恨みなされましよ自害した其跡で、  
 首なりと死骸なりと功に立つなら功にさんせ、さうばでござる兄様と  
 以ひつ、かたな取り上るやれましてしぼしとど、むる人は由良助、はつ  
 と驚く平右衛門、恥かるははなして殺してど、あせるをさへて、兄弟  
 共見上げた疑ひはれた、兄はあづまの供を赦す、妹はながらへて、未來へ  
 の追善、其追善は冥途の供と、もぎ取る刀をしつゝと持添、夫勘平連判

には加へしかど、敵一人も討とらず、未來で主君に云譯有るまじ、其云譯  
 の<sup>コリヤ</sup>爰にとぐつと突込む疊の透間下には九太夫肩先ききられて七顛  
 八倒、それ引き出せの下知より早く椽先き飛ねり平右衛門床に染だ體  
 をば無二無三に引きずり出え、ヒヤ九太夫めよい氣味と引立て、目通り  
 へ投げ付くれば起立せもせず由良助髻を搦でぐつと引寄せ、獅子身中  
 の虫とは儂れか事我君か高知を戴莫太の御恩を着ながら、敵師直が犬  
 と成つて、有る事ない事よう内通ひろいたな、四十餘人の者共は、親に別  
 れ子にはなれ、一生連添女房を君傾城の勤をさするも、亡君の怨を報じ  
 たさ寢覺にも現にも、御切腹の折からを思ひ出して無念の涙、五臟六腑  
 をしぼりしぞや、取わけ今宵は殿の逮夜、口にもろくの不淨を云ても、  
 慎み慎を重る由良助に、よふ魚肉をつき付けたないやといわれずねう  
 といわれぬ胸の苦しき、三代相恩のれ主の逮夜に、咽を通した其時の心

きの様に有ふと思ふ、五體も一度に腦亂し、四十四の骨も碎る様に有  
 たはやい、エ、獄卒め魔王めと、土に摺付け捻付けて無念涙にくれけるが、  
 平右衛門、最前鍔刀を忘れ置たり、こいつをばなぶり殺まといふまら  
 せ、命取すと苦痛させよ、畏たと抜くより早く、踊上り飛上り、切れ共僅二  
 三寸、明き所もなしに庇だらなり、のた打廻つて、平右殿、かかる殿、詫してた  
 べと手を合せ、以前の足輕づれなりと、目にもかけざる寺岡に三拜する  
 ぞ見ぐるしき、此場で殺さば言譯むつかし、くらい酔たていにして、館へ  
 連れよと羽織打させ庇の口、隠れ聞たる矢間千崎竹森が、障子ぐはらり  
 と引き明り、由良助殿段と誤り入りましてござりませ、それ平右衛門、く  
 らひ酔た其容に、加茂川で水糝かくらはせい、ハア、イ、ケ

○第八 道行旅路の嫁入

淨世とい、たがいひそめて、飛鳥川、ふちも知行も瀬とかはり、よるべも涙

の下人に結ぶ鹽冶の誤りは、戀のかせ杭加古川の娘小湊が言号結納も、  
とらず其儘にふり捨られし物思ひ、母の思ひ山科の聳の力彌をちから  
にて住家へ押しして嫁入も、世に有なしの義理遠慮婢つれず乗り物も、や  
めて親子の二人連れ、都の、「空に、心さす、雪のはだへも、さむ空は、寒紅梅の  
色添て、手先き覺へずこゝへ坂、さつた峠に、さしか、り見返れば、不二の  
煙の、空に消行衛も知れぬ思ひをば、はらす嫁入の、門火ぞと、いはふて三  
保の松原につゞく、並松街道をせましと打つたる行列り、誰れとしらね  
ど、浦山し、世が世ならわの如く、一度の晴を花かざり、伊達をするがの  
府中過、城下過ぐればきさんじに、母の心もいそぐと、二世の盃濟で後、  
鬨のむつ言さ、め言、親知らず子知らずと、鳶の細道もつれ合、嬉しから  
ふと手を引けば、母様の差合をわきへこかして鞠子川うつ山邊の  
現にも、殿御初めの新枕、せとの染飯こわいやら、恥かしいやら嬉しいや

ら案あんトて胸も大井川、水の流れと人心、もしや心のかはらぬか、日かげに  
 花の咲さかぬかど、いふて嶋田のうさはらし、我身の上を、あくとだに、人まら  
 ずかの橋こへて行けば吉田や赤坂の、まねく女の聲そろへ、縁をむすば  
 清水寺へ参らんせ、音羽ねはの瀧たきにどんぶりぞ毎日そふ言いて罷まがまんせ  
 そうじやいな、し、きがんかうがかいれいにうきう、かぐら大鼓たいこに、  
 こちのひるねを覺さされた、都どのこにあふてつらさが語りたや、  
 しも女夫めうとどか、さま、ならば伊勢さんの引合せひなびた歌も、身に取て、  
 よい吉左きさう右うになるみがた、あつたの社あれかどよ、七里の渡し帆はを上あて  
 船拍子ふねうし揃そろへて、ヤヤッッッッ取とる音は、鈴虫すずむしかいや死しりりす、鳴なや霜夜しもやと詠よた  
 るいさよふけてこそくれ迄かと、限り有る母いそがんと母が走はれば、娘も  
 走り空の、あられに笠覆かさひ、舟路ふねぢの友の、跡や先き庄野龜山せきとむる、伊  
 勢と吾妻あづまの別れ道、驛路えきぢの鈴すずの鈴鹿すずかこへ、間の土山、雨がふる水口の葉に、

以ひはやす、石部石塲いしべいじばで大石や、小石ひらふて我夫わがまと撫なつ、さすりつ手に  
すへて、やがて大津や三井寺みいであらの麓ふもとを越こて山科やまなかへ程なき、里へ、「いそぎゆく

○第九 山科の段

風雅ふうがでもなくしやれでなく、しやうとなしの山科やまなかに、由良助が佗住居わがすまい祇  
園たんの茶屋にきのふかき雪の夜明し朝戻り牽頭ひいて仲居なこうに送たられて酒がほ  
たへる雪こがし雪はこけいで雪こかさね、仁肺にんたひ捨し遊あそびなり、旦那だんな申し  
旦那、祇座敷の景けいようござります祇庭ぎでんの藪やぶに雪持つてとなつた所、どん  
と繪えにかいた通り、けうとひまやないかのふれ品しやう、此景を見て、外へは  
ごつちへもひきたうはござりませうまいがな、朝夕に見ればこそ有れ  
住吉すまきちの岸きしの向むかひの淡路島山あはぢといふ事しらぬが、自慢ひまんの庭でも内の酒は  
呑ぬのく、通とらぬやつつく、奥おくへく、奥おくはどこにぞ祇客ぎやくが有ると  
先まきに立て飛石とびいしの、詞ことばもしどろ足取りもしどろに、見ゆる酒機さかき嫌けんに戻り

〇九

そふなど女房に石が輕う汲で出る茶屋の茶方も氣の端香、氷寒からふ  
 と惚氣せぬ詞の鹽茶醉醒し一口呑で跡打明け、奥無粹なぞや、く折  
 角面白ふ酔た酒醒せとは、ア、ア、降たる雪かな、以かに餘所のわる達ちが  
 嚙惚氣とや見給ふらん、それ雪は打綿に似て飛で中入れと成奥はか、  
 様といへばとつと世帯染といへり、加賀の二布へ氷見舞の遅は御用捨  
 伊勢海老と、盃穴の稻荷の玉垣は朱ふなければ信かさ免るといふ様な  
 物かい、これくく、こぶ返りじや足の大指折つたく、氷つとよし  
 く、次手にかうじやと足先きで、これはたへさしやんすか嗜しやん  
 せ、さ、が過ぎるとたはいがない、ほんに世話でござらふのと物やはら  
 かにあいしらふ、力彌心得奥より立出、申しく母人、親父様は御寝なつ  
 たか、是上げられいと指出す親子が所作を塗分けても、下地は同じ桐枕、  
 應は夢現、もふ皆いにやれ、くそんならば旦那宜しう、若旦那

ちと御出を目遣ひでいに際まはらるる歸りける、聲聞へぬ迄行き過すまさせ由良助枕を上あ、方彌遊興ゆりきに事寄せ丸めた此雪、所存しよぜん有ての事じやが何と心得たぞ、雪と申物は、降時ふるに少しの風にもちり、軽い身でござりませう共、あの如く一致いつちして丸まつた時は、巖いわの雪吹ふきに岩をも碎くだく大石おおい同然ぜん、重いおもい忠義、其重い忠義を思ひ丸免まるまた雪も、餘あまり日數を延過のびとしては、と思召しての、由良助親子、原郷右衛門など四十七人連判の人数は、皆主なしの日かけ者、日かけにさへ置けば解ぬ雪、せく事はないといふ事、爰こゝの日當りあた奥の小庭へ入れて置け、螢はたるを集め雪を積つむも學者がくしゃ、の心長ながき例たと、女共、切戸内から明けてやりやれ、堺さかいへの狀認めん飛脚めいしやくか來たらばしらせよ、間まいの切戸のうち、雪こかし込戸を立つる襖ふすま引き立入にける、人の心の奥深ふかき山科の隠れ家を、尋て爰こゝにくる人は、加古川本藏行國が女房となせ、道の案内の乗物をかたへに待せ只一人、刀脇指たわきさしさすげ

に行儀亂さず庵いなりの戸口頼ませう、くといふ聲に襪たすきはずして飛んで出  
 る、昔の奏者そうじや今のりん、どうれといふもつかふと成る、大星由良助おほしほ頼  
 宅たくは是かな、左様ならば加古川本藏が女房となせでござります、誠に其  
 後は打絶たてました、ちとお目にかゝりたい様子に付き遙はる々参りましたと、  
 傳つたへられて下されといひ入させて表おもての方、乗物是へと申寄ませさせ、娘爰へ  
 と呼出せば、谷の戸明けて鶯うぐいすの梅、見付けたるを、笑顔がほまぶかに着きたる  
 帽子ぼうしの内うち、力彌様のお屋敷はもふ爰かへ、わしや耻はしいと媚なまめかし、取ち  
 らず物片付けて、先まづお通りなされませと、下女つねが傳つたへる口上に駕かの者皆  
 歸れ、御案おんない内頼うちますといふもいそぐ娘の小涙、母に付き添そ坐まに直なれば、  
 お石しとやかに出向いひ、是こゝ、お二に方共かたよろぞや御出ごい、とくよりお目  
 にもかゝる筈はずお聞及きひの今の身の上、お尋もとに預まりお耻はしい、あの改あらたまつ  
 たお詞ことば、お目にかゝるは今日初はめなれど、先達まて御子息ごこ力彌殿に、娘小涙

三九

を言号致したから、御前なりわたしなり、姫同士御遠慮に及ぬ事、是はく、悼入御挨拶殊に御用しげ、以本藏様の奥方、寒空といひ思ひがけな、以御上京、となせ様はとも有れ小浪御寮、岨都珍らしからふ、祇園清水智恩院、大佛様御らうじたか、金閣寺拜見あらばよい傳が有るぞへど、心置けなき挨拶に、只あい／＼も口の内、帽子まばもき風情なり、となせの行儀改めて、今日参ると餘の儀にあらず、是成る娘小浪云号致して後、御主人鹽治殿不慮の儀に付き、由良助様、力彌様、御在所もさだかならず、移りかへるは世のならひ、かはらぬは親心とやかくと聞き合せ、此山科にござる由承はりました故、此方にも時分の娘早うお渡し申したき、近比押し付けがましいが、夫も参る筈なれど、出仕に隙のない身の上、此二、腰の夫どが魂是をさせば、則ち夫ど本藏が名代と、私しが役の二人前、由良助様にも御意得まし、祝言させて落付きたい、幸けふは日がらもよし、御

用意よういなされ下くださりませと相述あひまる、是こゝは思おもひも寄よらぬ仰おほせ、折せ悪あう夫おとこと由よし  
 良助りょうすけは他行たぎやう、去いりながら若わかし宿やどにたたりまして能目のめにかかり申まふさなら  
 ば御深切ごせんせつの段くだ千万せんまん忝かたじけなう存ぞんじまする、云号いひせう致いたした時ときは、故殿こてん様の御恩ごんに  
 預あづかり、御知行頂戴ごぎやうてうだい致いたし罷有まかりる故、本藏ほんざう様の娘御むすめを賞もらませう、然しからばくれふ  
 と云約いひやく東とうは申またれ共ども、只今ただいまは浪人なみのり、人づゝのひ迎むかもござらぬ内うちへ、いかに約  
 束くわなれば迎むか、大身おほしんな加古川殿かこがわてんの御息女ごきよめ、世話せわに申ます挑燈ちやうてんに釣鐘つりかね釣り合あぬ  
 い不縁ふえんのもと、結納むすなを遣はなしたと申ますでいなしぞれへ成なりと外ほかへ、  
 御遠慮ごえんりよなう遣はなはされませと申まさるゝでござりませうと、聞きてはつとは  
 思おもひながら、調まわね石様いしやうの能のつしやると、いかに卑下ひげなされう迎むか、本藏ほんざう  
 と由良助様りょうすけやう、身上しんじやうが釣合つりあぬと、な、そんならば申ましませう、手前てまえの主人しゅじんは小  
 身故しんご、家老かろうを勤つとむる本藏ほんざうは五百石ごひやくいし、塩治殿しんぢてんは大名だいめい、御家老ごかろうの由良助様りょうすけやうの千五  
 百石せんごひやくいし、ずりや本藏ほんざうが知行ちぎやうとい、千石違ちかふを合點あひてで云号いひせうはなされぬか、只今ただいま

五九

は御浪人、本藏が知行どの皆違ふてから五百石、イ其れ詞違ひまする、五百石の扱置き、一万石違ふても心ど、心が釣りあへば大身の娘でも嫁に取るまい物でもない、ムこりや聞き所れ石様、心ど心が釣り合ぬとれつしやるは、どの心じや、サ聞ふ、主人鹽治判官様の御生害御短慮とは云ながら、正直を元とするれ心ど發し事、それに引きかへ師直に金銀を以て媚諂ふ追蹤武士の祿を取る本藏殿と、二君に仕へぬ由良助が大事の子に、釣り合ぬ女房は持たせられぬと、聞もあへず膝立て直し、阿へ諂ひ武士とは誰が事、様子によつては聞すてられぬそこを赦すが娘のかいひさ、夫どに負るは女房の常、祝言有ふが有るまいが、云号有るからは天下晴ての力彌が女房、阿面白、女房ならば夫どがさる、力彌にかはつて此母がさつた、ムと云放し、心隔の唐紙をいたと、引立入にける、娘はいつと泣出し、折角思ひ思はれて云号した力彌様に、逢せてやろどのれ詞を便りに

思ふてきた物を、姑御しやうごめのどうよくに、さら開れる覺はわたしやない、母様と  
 ふ予詫言わがまて、祝言させて下さりませと絶すがり、歎けば母親は、娘の顔をつ  
 くくど、打ながめく、親の欲目よくめかしらね共、本ほんにそなたの器量きりやうなら、十  
 人並なみにもまさつた娘よい聲むこをがなど詮議せんぎして云号した力彌殿、尋てき  
 たかひもなう、聲にしらさずさつたとは、義理にもいはれぬれ石殿、姑去しやうごめ  
 たは心得ぬ、く扱くり浪人の身のよるべなう筋目を云立て、有徳うとくな町人  
 の聲に成つて、義理も、法も忘れたな、ち小浪、今云ふ通りの男の性根しやうね、さつ  
 たといふを面當つうたうはえがる所は山、外へ嫁入りする氣はないか、コレ大事  
 の所泣かず共えつかりと返事しや、コレどうじや、くんと尋る親の氣は張はり  
 弓ゆみ、母様の胸欲むねよくな事れつしやりませ、國を出る折と、様のれつしやつ  
 たは、浪人なみのりまでも大星力彌、行儀とひ器量きりやうといひ、仕合せな聲を取つり、  
 貞女ていぢよ兩夫りやうふに今日ま目めず、譬夫たとひとに別れても又の夫とを設もうけなよ、主有る女の不

義同前必<sup>く</sup>寢覺<sup>ねざめ</sup>にも殿御大事を忘る、な、由良助夫婦の衆へ孝行<sup>かうぎょう</sup>を盡<sup>つく</sup>し夫婦中、睦<sup>むつ</sup>しい迎<sup>むか</sup>ひしやらにも悵氣<sup>りんき</sup>ばし去<sup>さ</sup>て去<sup>さ</sup>る、な、案<sup>あん</sup>せうか迎隱<sup>むかひかげ</sup>さずと懷妊<sup>みもち</sup>に成<sup>な</sup>つたら早速<sup>さつそく</sup>に、しらせてくれと罷<sup>ま</sup>つ去<sup>さ</sup>やつたをわたしやよふ覺<sup>さ</sup>て居<sup>ゐ</sup>る、去<sup>さ</sup>れていんでど、様<sup>さま</sup>に苦<sup>く</sup>に苦<sup>く</sup>とかけてきふいふてどふ云<sup>いひ</sup>譯<sup>わけ</sup>が有<sup>あ</sup>ふ共、力彌<sup>りき</sup>様も外に餘<sup>あ</sup>の殿御、わしやいやくと一筋<sup>ひとすぢ</sup>に戀<sup>こゝろ</sup>を立<sup>た</sup>ぬく心根<sup>こころね</sup>と、聞<sup>き</sup>に絶兼<sup>たへかね</sup>母親<sup>はは</sup>の、涙<sup>なみだ</sup>一途<sup>いちず</sup>に突詰<sup>つよめ</sup>し覺悟<sup>かくご</sup>の刀<sup>やいば</sup>抜き放<sup>はな</sup>せば、母<sup>はは</sup>様是<sup>こゝ</sup>に、何事<sup>なにごと</sup>と押しとめられて顔<sup>かほ</sup>を上<sup>あ</sup>、何事<sup>なにごと</sup>とは曲<sup>まが</sup>がな、今<sup>いま</sup>もそなたが、いふ通り、一時<sup>ひととき</sup>も早<sup>はや</sup>う祝言<sup>しうげん</sup>させ初孫<sup>はつまご</sup>の顔<sup>かほ</sup>見<sup>み</sup>たいと、娘<sup>むすめ</sup>に甘<sup>あま</sup>い、爺<sup>おや</sup>のなら、ひ、悦<sup>よろこ</sup>んでござる中<sup>なか</sup>へまだ祝言<sup>しうげん</sup>もせぬ先<sup>ま</sup>きに、去<sup>さ</sup>れて戻<sup>かへ</sup>りました迎<sup>むか</sup>ひと、運<sup>はこ</sup>んでいなれふぞ、と、いふて先に合點<sup>あてな</sup>せにや仕様<sup>しやう</sup>、もやうもないわいの、殊<sup>こと</sup>にそなたの先妻<sup>せんさい</sup>の子<sup>こ</sup>、わしとはなさぬ中<sup>なか</sup>じや故<sup>ゆ</sup>によそにしたかと思<sup>おも</sup>はれて、い、と、いふも生きて、居<sup>ゐ</sup>られぬ義理<sup>ぎり</sup>、此<sup>こゝ</sup>通りを死<sup>し</sup>だ跡<sup>あと</sup>で爺御<sup>おやご</sup>へ云<sup>い</sup>譯<sup>わけ</sup>

してたもや、調勿体ない事たつしやります、殿御に嫌はれわたしこそ死  
 べき筈、生きてお世話世話に成る上に苦を見せまする、不孝者母様の手にか  
 けてわたしを殺して下さりませ、去れても殿御の内爰で死れば本望、玄  
 や、早う殺して下さりませ、調チチよう云やつたでかしやつた、そなた斗り  
 殺しおせぬ、此母も、三途の友そなたをたれが手にかけて、母も追つ付け  
 跡から行く、覺悟はよいかと立派にも涙と、いめて立か、り、調コレ小浪、アレあ  
 れを聞きや表に虚無僧の尺八、鶴の巢籠、鳥類でさへ子を思ふに科もな  
 り子を手にかけるは因果と因果の寄り合と、思へば足も立兼て、ふるふ  
こよしやう拳と漸しんにふり上る刃やいばの下尋常じんじやうに座をし免手を合せなむあゝだ佛と、唱  
 る中も、御無用と聲かけられて思はずもたるみし拳尺八も俱に、ひつそ  
 どまづまりしが、調そふじや、今御無用とどめれたり、虚無僧の尺八よな、  
 展けたいが山やまで、無用といふに氣たくれし、未練みれんなど笑はれな、娘覺悟

はよいかやと又ふり上くる又吹出す、とたんの拍子ひょうしに又御無用ごむよう、又御  
 無用と止とどめとの修行者しゆぎやうの手の内か、ふり上た手の中か、又刀の手の中御  
 無用、悴力せがれ彌に祝言しうげんさせう、エ、そふいふ聲は石様そりや眞實まじつか誠かと  
 尋る襖ふすまの内よりも、わひに相生あいたひの松こそめでたか、とけりと、祝儀の小謠うたひ  
 白木の小四方こしほ、目八分に携出わづかへ、義理有る中の一人娘、殺きふと迄思ひ詰た  
 となせ様の心底、小浪殿の貞女、志こころざしがいとをしさ、させにくい祝言さす其  
 ろはり、世の常つねなむぬ嫁の盃請取は此三方、御用意ごよういあらばと指置けば、少  
 しは心休やすまりて抜いたる刀鞘さやに納免のうめん、世の常つねならぬ盃とは、引取物の御所  
 望もちうならん、此二腰ふたこしの夫とが重代ぢうだい、刀の正宗、指添さしぞへの浪の平行安、家にも身に  
 もかへぬ重寶ちゆうほう、是を引き出と皆迄云はさず、浪人なみのりと侮あなまつて價あたいの高い二腰  
 まさかの時に賣り拂はらへといぬ、斗りの鞆引き出、御所望ごしやうすずは是では  
 ない、と、そんなう何が御所望ぞ、此三方へは加古川本藏殿の、お首を乗せ

て貰たい、ま、そりや又なせな、御主人鹽治判官様、高師直に恥恨有て、鎌倉  
 殿で一、刀に切かけ給ふ、其時こなたの夫加古川本藏、其座に有つて抱留、  
 殿を支た斗りに御本望も透られず、敵は漸薄手斗り、殿はやまゝ御切  
 腹、口へこそ出し給へね、其時の御無念は、本藏殿に憎まゝがかゝる、ま  
 か、有まいか、家來の身として其加古川が娘、あんかんと女房に持様な力  
 彌じやと、思ふての祝言ならば、此三方へ本藏殿のしらが首、みやと有れ  
 ばどなたでも、首を並る尉と嫗、それ見と上で盃させう、サ、いやか、應かの  
 返答をど、尖き詞の理屈誥、親子のはつと指俯途方にくれし折からに、加  
 古川本藏が首進上中を、恥受け取なされよと、表に扣し薦僧の、笠脱捨て  
 しづゝと内へはいるは、恥前ほど、様、本藏様、愛へどうして此形の、  
 合點がいかにぬこりやどうぞやと、答る女房、サ、さばくど見ぐるしい、始  
 終の子細皆聞た、そち達ちに知らさず、愛へ來と様子に追つて、先だまれ、

其元どが由良助殿御内證ないしやうに石殿いしだんよな、今日の時宜ときぎかくわらんと思おもひ妻さい子しにもしらせず、様子を窺うかががふ加古川本藏、案あんに違たがはず拙者せつしやが首、鐙引出しやうひきだにはほしいとよな、へい、いやはやそりや侍のいふ事、主人の怨あだを報むかはんどいふ所存しよぞんもなく、遊興ゆうかうに耽ふけり大酒に性根しやうねを亂し、放埒ほうらつ成る身持ち日本一のあほうの鏡蛙かがみかえるの子は蛙に成る、親に劣ぬ力彌やめが大だはけ、うるたへ武士のなまくらにはがね、此本藏が首は切れぬ、馬鹿ばか盡つくすなど踏碎ふみくだく、破われ三方のふち放はなれ、こつちから簀すいに取ぬ、ちよこざいな女めと云せも果はらず、過あや言ごとなど本藏殿、浪人の鑄刀さぎ切れるか切れぬか鹽梅あんばい見せう、不祥ふしやうながら由良助が女房、望む相あい手じや勝負しょうふくくど裾すそ引き上げ、長柳ながやしにかけたる鎗やり追おつ取突つか、らんず其氣色けしき、是は短氣たんきなマア待まちつてととゞめ隔へたる女房娘にやうな、邪魔じまひろぐなどわらけなく、右と左へ引退ひきひる、間まもわらせず突つきかくる、鎗やりのまは首引摺つかみ、もぢつて拂はらへば身を背そむけ、諸足もろあしぬはんとひらめあす

はむねをけつて蹴上れば、拳放れて取落す、鎗奪はれじと走り寄、腰際帯  
 際引つ擲、どふど打付け動かせず、膝にひつ敷く強氣の本藏、まゐられて  
 石が無念の齒がみ、親子のはあゝあやぶむ中へ、かけ出る大星力彌捨  
 たる鎗を取る手も見せず本藏が馬手のあばら弓手へ通れと突通す、う  
 んと斗りにかつばと伏、情なやと母娘取り付、歎くに目もかけず、ど  
 免さゝんど取直を、待て力彌早まるなど、鎗引き留て由良助手負に向  
 ひ、一別以來珍らし、本藏殿、御計略の念願どゞき、智力彌が手にか、つ  
 て、嘸本望でござふのと、星をさいたる大星が、詞に本藏目を見開き、主  
 人の戀憤を晴さんと此程の心づかひ、遊所の出合に氣をゆるませ、徒黨  
 の人数ハ揃ひつらん、思へば貴殿の身の上は、本藏が身に有べき筈、當春  
 鶴が岡造營の砌主人挑井若狹助、高師直に耻しめられ、以ての外憤り、某  
 を密に召されまつかうゝの物語、明日御殿にて出つくはせ、一と刀に

討ち留むると思ひ詰たる御顔色、とめてもとまらぬ若氣の短慮、小身故  
 に師直に賄賂薄きを根に持つて、恥しめたるぞ知つたる故、主人にし  
 せず不相應の金銀衣服臺の物、師直へ持參して、心に染ぬ諂ひも主人を  
 大事と存ずるから賄賂果せあつちから誤つて出た故に、切るに切られ  
 ぬ拍子ぬけ、主人が恨もさらりと晴、相手かはつて鹽治殿の難義となつ  
 たの則ち其日、相い手死ずば切腹にも及ぶまじと、抱とめたは思ひ過し  
 た本藏が、一生の誤りは娘が難義としらがの此首、尊殿に進せたま、女房  
 娘を先へ登し媚諂ひしを身の科に恥暇を願ふてな、道をかへてそち達  
 ちより二日前に京着、わかひ折りの遊藝が益にたつた四日の内、こなた  
 の所存を見ぬいた本藏、手にか、れば恨を晴約束の通り此娘、力彌に添  
 せて下さらば未來永劫御恩は忘れぬ、手を手を合して頼み入る、忠義にな  
 らでは捨ぬ命、子故に捨つる親心推量有れ由良殿といふも涙にむせ返

れば、妻や娘は有るにもあられず本にかうとは露しらず死ねくれた斗ばつか  
 りに、恥命捨るはあんなまりな、冥加めいがの程が恐ろしい、赦ゆるめて下され父上と  
 かつばとふえて、泣きさけぶ、親子が心思ひやり、大星親子三人も、俱にしほ  
 れて居たりしが、ヤ本藏殿ほんざうだん君子は其罪を悪にくんで其人を悪くせずとい  
 へば、縁えんは縁恨は恨と、格別かくべつの沙汰さたも有るべきにと嘸恨みぞに思はれんが、所  
 詮せん此世を去る人、底意そこいを明けて見せ申さんと、未前みぜんを察さつして奥庭おくにわの障子しょうじ  
 さらりと、引明ければ、雪を束つかねて石塔せきとうの五輪ごりんの形を二ツ迄、造立つくりてしは  
 大星が、成行果を顯はせり、どなせはさかしく、御主人ごしゅじんの怨を討つて後  
 二君に仕へず消きるといふれ心のあの雪、力彌殿も其心で娘を去つたの  
 ぞうよくは、御不便ごびん餘つて恥石様、恨だかわしや悲しい、どなせ様の恥つ  
 しやる事、玉椿つばきの八千代迄共祝いはいはれず、後家ごけに成る嫁取た、此様なめでた  
 以悲しい事はない、かう以ふ事が以やさに、むごうつらういふたのが嘸ま

憎かつたでござんしよなふ、エイサわたしこそ腹立つまゝ、町人の聲に成  
 つて義理も法も忘れたかといふたのか、耻しいやら悲しいやらどふも  
 顔が上られぬれ石様となせ様、氏も器量も勝れた子何として此様に、果  
 報拙はつたなに生れやと聲も、涙にせき上る本藏あつき涙を祀さへ、アハ嬉しや本  
 望や吳王詞を諫免て誅せられ辱めを笑ひし吳子胥が忠義ハ取るに足ず、  
 忠臣の鏡かみとは唐土ちゆうどの豫讓、日本の大星昔より今に、至る迄、唐と日本にた  
 つた二人り其一人を親に持つ、方彌が妻に成つたるハ女御更衣に備は  
 るより、百倍勝つてそちが身の武士の娘の手柄者、手柄がらな娘が聳殿へ、祀  
 引の目錄進上と懷中くわいちゆう方取出すを、方彌取つて押し戴き披き見れば、コハ以  
 かに目錄ならぬ、師直が屋敷の案内一くに、げんくわん玄關長屋侍部屋、モ水門物置柴  
 部屋迄繪圖えずにズくハしく書き付けたり、由良助はつと押し戴き、調有難し  
 く、徒黨とどうの人数にんすうの揃そろへ共、敵地の案内知れざる故發足も延引せり、此繪

圖こそは孫吳が秘書我か爲の六韜三略兼て夜計と定めれば、繼梯子  
 にて塀を越し忍び入には椽側の、雨戸のづせば直に居間、爰をまきつて  
 かう攻てと親子が悦び、手負ながらぬからぬ本藏、く夫れは僻言な  
 らん、用心嚴まき高師直、障子襖は皆尻ざし、雨戸に合榫合樞、こぢてはは  
 づれずかけやにて、こぼたば音して用意せんがそれいかゞ、夫れにこ  
 そ術われ、凝ては思案にあたはずと遊所の歸るさ、思ひ寄つたる前裁  
 の雪持つ竹、雨戸をはずせ我工夫、仕様を爰にて見せ申さんと庭に、折し  
 も雪ふかくさしにも強き大竹も雪の重さに、ひいなりとしなりし竹を、  
 引き廻して、鴨居にのめ、ゆきにたはむは弓同然、此如く弓を拵へ弦を張  
 り、鴨居と敷き居にはめ置て、一度に切て放つ時は、まづ此様にと積つた  
 る枝打はらへば雪ちりて、のびるは直成る竹の力、鴨居たはんでみぞは  
 づれ、障子残らずばたぐく、本藏苦しき打忘れ、したりく、計畧とい

ひ義心といひ、か个程の家來こほどを持ながら、了簡りょうけんも有べきに、あさきたくみの  
 鹽冶殿、口くちれしき行跡よるまじやど、悔を聞に御主人の御短慮たんりょ成御仕業しわざ、今の忠義  
 と戰場せんりやうの恥馬先せんばきにて盡つくさばと思へば無念むねんに閉とぢふさがる、胸ななの七重ななの  
 門の戸を渡わたるゝ、涙斗なみだりなり、力彌ちからはまづ、恥り立て父が前に手をつ  
 かへ、本藏殿ほんざうの寸志すんしにより、敵地の案内知れたる上は、泉州せんしゅう塚つかの天川屋義  
 平方へいほうへも通達つうたつし、荷物にものの工面くめん仕らんと聞もあへず何さ、山科やまのに有る  
 事隠かこれなき由良助、人數集あつめは人目有、一先つ塚へ下つて後ちあれから  
 直ただくに發足はつそくせん、其方は母嫁ははよめとなせ殿諸共とのとに、跡あとの片付き諸事万事何も  
 かも、心残こころりのなき様に、ナナコリてあその夜舟よふねに下るべし、我は幸あはひ本藏殿ほんざうの  
 忍しのび姿すがたを我か姿わがすがたと、けさ打うかけて編笠あみがさに、恩おんを戴いたく報謝ほうしゃがへし未來みらいの迷まよ  
 ひ晴はらぎん爲な、今宵こんしやう一夜いちやは嫁御寮よめりやうへ、舅おやぢが情なさけのれんば流ながし、歌口うたぐちしめして立  
 出れば兼かて覺悟かくごの恥石ちいしが歎なげき、御本望ごほんぼうをど斗たりにて名殘惜なごしさの山やまを

いぬ心のいぢらしさ。手負は今を知死期時ど、様申しど、様とよべ  
 ど、こたへぬだんまつま、親子の縁も玉の緒も切れて一世のうき別れ、わ  
 つと泣く母泣娘、俱に死骸に向ひ地の回向念佛は戀無常、出行く足も立  
 せまり、六字の御名を笛の音に、なむあみだ佛、なむあみだ、是や尺八ばん  
 のふの枕ならぶる。追善供養闈の契りは一夜ぎり心残して、立出る

○第十 天河屋の段

津の國と和泉河内を引き受けて、餘所の國迄舟よせる三國一の大港、堺  
 といふて人の氣も賢き町に疵もなき、天河屋の義平迎金から金を設溜、  
 見かけ輕く内證は重い暮に重荷をば、手づから見世でしめ括り大船  
 の船頭、是でてうど七竿、請取ましたと指荷ひ行も黄昏亭主のほつと日  
 和もよしよい出船といひつ、たばこきせる筒、すい付けにこそ入にけ  
 れ、家の世繼は今年四ツもりの十九の丸額親方よりも我が遊び、始り

じやく、面白おもしろい事ことく、なき辨慶べんけいのしのだ妻つまとうざい、愛あわれに哀あはれど  
 いめしは、此こゝよ玄松げんそうにとゞめたり、元來もとより其身そのみは父ちち斗とり、母ははの去されて、いなれ  
 たで、泣辨慶なきと申まをすなり、伊五いごよ、もふ人形廻にんぎやうし以もく、願ねがさんさんを呼よん  
 でくれいやい、其様そのさまにむり言ことしやると、旦那様だんなさまにいふてこなはんも追  
 い出いさすぞ、跡あとの月つきから朧おぼろかまがわれて、手代てしろは手代てしろで鼠ねずみの子こか何なにんぞ  
 の様に、目めが明あかぬといふて追出おしだし、飯焚めしだきは大きな欠あきしたといふて隙ひまや  
 り、今いまではこなはんと、わしと旦那だんなはん斗とり、とふで此内このうちを抜ぬけそけする  
 のかしてちよこく、舟ふねへ荷物にものが行いく、欠落かけ落ちするなら人形箱にんぎやうばこ持もていこふ  
 ぞや、人形廻にんぎやうしより朧おぼろりやもふねた以も、アレもふ朧おぼろれ迄までをそ、のかす程ほど  
 此こゝの、よごさるは朧おぼろれか抱だて寝ねてやろいやじや、なせに、われには乳ちち、がな  
 い物もの朧おぼろりやいやじや、又また無理むりいはしやる、こなたが女おんなの子こなら、乳ちちより  
 よい物が有ありけれど、何なにをいふても相聲あひこゑ同どう士し、是こゝも涙なみだの種かたぞかし、折節せつせう表あはへ

侍二人誰頼ふ義平殿は祀宿にかと、いふもひそめく内からつこと、旦那様ハ内に、我れ等、人形廻しでいそがしい、用があらばはいつた、内致さぬも無禮、原郷右衛門、大星力彌密に御意得たいと申て祀くりやれ、何じや腹へり右衛門、大食喰や、こりやたまらぬ、旦那様大きな、けないどが見へましたと叫ぶよし松引連れて奥へ入ば、亭主義平、又あほうめがしやなり聲と、云つ、出て、郷右衛門様力彌様、アまわ是へ、御免有と座をまめて郷右衛門、段々貴公の祀世話故万事相調ひ、由良助も祀禮に參る筈なれ共、鎌倉へ出立も今明日、何角と取込忪力彌を名代として失禮の祀斷、是はく御念の入た義、急に御發足とござりませすれば、何角祀取込でござりませうに、成程郷右衛門殿の仰の通り、明早、出立の取込、自由ながら私に參り祀禮も申受祀頼申た跡荷物も、彌今晚で積仕舞か、祀尋申せと申渡しましてござりませ、成程祀誂の彼道具一まき、段々大

廻して遣はし、小手躰こてい當小道具の類は、長持に仕込み以上七竿ななさん、今晚出船を幸船頭せんせんとうへ渡し残るゝ竊挑燈鎖鉢卷しのびぢやうらんくさりうちまき、是は陸荷をかかで跡を遣はす積りてござります、郷右衛門様を聞なされましたか、いかるに世話せわでござります、いか様主人鹽治公の御恩を受けた町人も多おほござれ共、天河屋の義平は、武士も及ばぬ男氣な者と、由良殿が見込大事を頼申されたも尤、併しかし鎗長刀の格別鎖襖かくべつくさりかたびらの繼梯子つぎばしのと申す物は常つねならぬ道具、を買なざる、にふしぎの立ちませなんだかな、其義は細工人へ手前の所は申さず、手附けを渡し金と引かへに仕る故、いつくの誰と先様には存去ませぬ、成程尤、次手ついでに力彌めも頼申まじよ、内へ道具を取り込荷物の拵こしらへ御家來中の見る目いどふしてを忍びなせられましたな、ホッ夫れも御尤の頼尋、此義を頼まれたるど、女房は親里へ歸し、召使つかひは垂邪たひびつかを付けて段々に隙遣はし、残るはあほうと四ツに成る悴、現る筋はござりませぬ、扱ふ

驚き入ましてござりまする。其旨を親共へも申聞して安堵させませう、  
郷右衛門殿に立なされませぬか、いか様出つ達に心せさせまする。儀平殿  
に暇申ませう。然らば由良助様へも宜しう申聞かしませう。おさらば、さ  
らばと引別れ二人は旅宿へ立歸る。表し免んとする所へ此家の舅太田  
了竹ちやうちく、まめまの宿にかと、ずつと通つてきよろしく眼、是は親仁様よう  
こそれ出扱此間へ女房そのを養生がてら遣はし置き、嘸に世話に薬で  
も給まするかな。薬も吞まする食も喰やす、夫れは重疊じゆうたう、イヤ重疊でござら  
ぬ、手前も國元に居たときは、斧九太夫殿を扶持も賞ひ相應の身代今、  
は一ち僕さへ召し遣はぬ所へ、さしてもない病氣を養生さえてくれよと  
指し越されたは、子細こそあらんが、夫れいとも有れ、生若かい女不埒が  
有てい貴殿も立たず、身共も皺腹でも切ねばならぬ、所て一ツの相談、先  
づ世間は隙やり分、暇の状をこれにして、何時でも爰の勝手に呼

戻す迄の事、たつた一筆つゝ書て下されど、輕ういふのも物工ものたくみ一物有と  
 知りながら、いやどいは、女房を直くに戻さん戻りて、頼れた人へ  
 詞も立ずと取つ置いつ思案する程いやかどよじや不得心とくしんなら此方に  
 も片時置かれず戻すからは此了竹もにじり込み、へとばつて俱に攪かきま  
 やか應かの返答と、込付けられて迄の義平、工に乗るが口惜やど、思へど  
 こちよの一大事見出されてはどかけ硯取つて引き寄せさら〜と、書  
 き認め是しはやるからは了竹殿親でなし子でなし重かさねて足踏あしふみ仕やんな底  
 工有暇ひまの狀弱よほ身をくふてやるが殘念、持つていきやれと投げ付ければ、  
 手早く取つて懷中くわいぢゆうし、よい推量すいりやう、聞けば此間を浪人共が入込みひそめ  
 くよし、そのめに問へ共しらぬとぬかす、何仕出そうも知れぬ聿娘えびめを添  
 して置くが氣づかひ、幸ひ去る歴々れきれきから貫もろしかけられ、去狀取ると直くに  
 嫁入よめいれさする相談さうだん、一ぱらまいつて重疊ていじやうく、譬たとへ去狀なき迎も子迄な

しさる夫とを捨外へ嫁入する性根なら心は殘らぬ勝手く、勝手に  
 するは親のこうけ、今宵の内に嫁らす、細言はかずと早歸れと、偶擲  
 で門口より外へ蹴出して跡びつしやりほうく起て、義平、なんぼ擲  
 ではり出して、嫁を先から仕拵へ金温まつて蹴られたりやどふや  
 ら痴氣か直つたと口ハ達者に足腰を撫つさせりう逃げへに、つぶや  
 き、立歸る、月の曇にかげ隠す隣家も寐入る亥の刻過ぎ此家をめが  
 けて捕手の人數十手早細、腰挑燈灯かげを隠して窺ひ、犬とればし  
 き家來を招耳、打すれば指心得門の戸せの玄く打た、く、誰じやくも  
 及びこし、宵にきた大船の船頭でござる、船賃の算用が違ふた、ちよつ  
 と明て下され、仰山な僅の事であるあそ來たく、今夜うける船、仕  
 切て貰ひにや出されませぬと、いふもこわ高近所の聞へと義平の立出  
 何心なく門の戸を明ると其儘捕たく、動くな上意と追取巻く、何故

と四方八方、眼を配れば捕手の兩人、何故とは横道者儕鹽治判官が家  
來大星由良助に頼れ、武具馬具を買調へ大廻しにて鎌倉へ遣はす條、急  
き召捕り拷問せよとの御上意遁れぬ所じや腕廻せ、是は思ひも寄らぬ  
お咎、左様の覺聊なし定て夫れは人違へといはせも立てず、ぬかすま  
い、争はれぬ證據有、家來共、はつと心得持來るは宵に積たる莞筵荷の  
長持、見るより義平は心も空、動かすなど四方の十手、其間に荷物を切  
解き、長持明けんとする所を飛か、つて下部を蹴退、蓋の上にとつかど  
すはり、鼈忽千五、此長持の内に入置たは、去る大名の奥方、お誂の  
手道具、お具足櫃の笑ひ本、笑ひ道具の注文迄、其名を記置たれば、明けさ  
して、歴々のお家のお名のお出る事、御覽有つて、いづれものお身の上  
にもか、りませうぞ、彌胡亂者、中々大抵では白狀致すまい、お申し合  
せた通り合點でござると、一問へかけ入一子よし松を引立出、義平、長

持の内にも有れ、鹽冶瀝人一統しやう小堅かたまり、師直を討つ密事の段、儂能わね  
 くしりつらん、有やうに言いばよしいはぬと忽たちまち悴が身の上、コリヤ是を見よ  
 と抜き刀、稚たさなき咽のどに差付けられはつとは思へど色も變へんせず、ニ女童わらわを  
 責せむる様さまに、人質しち取ての御詮議せんぎ天河屋の義平は男でござるぞ、子に羈はだれ存  
 せぬ事を存じたとい得申さぬ曾かつて何にも存せぬ、知らぬ、知らぬ、と言いか  
 ら金輪こんりんならく憎にくしと思は、其悴我が見る前で殺したく、胸むね性骨しやうぼねの  
 太またいやつ、管鎗くわんやう銃砲じゆう鎖さ襪わ、四十六本の印迄調へやつたる儂われか、知らぬとい  
 ふていはしてたこふか、白狀せぬと一寸矯たごめ一分刻ふんまひに刻むが何ぞ、面おもて白  
 い刻きざれう、武具は勿論公家武家の冠鳥帽子かんりやま、下女小者が藁沓迄買調へて  
 賣うるが商人あきんど、それふしん迎御詮議あらば、日本に人種じんしゆは有るまい、一寸試たご  
 も三寸繩しやうばいも商賣故に取くる、命、惜たじひと思ひぬ、殺せ、悴も目の前突け  
 くく、一寸試しの腕うでから切るか胸むねから裂さか、肩骨脊骨かたほねも望み次第、と指

付け突付け我子をもぎ取り子に羈はたれぬ性根しやうこんを見よと、し先殺すべき其吃きつ相まう聊爾りやうにせまひ義平殿暫しと長持より、大星由良助よし金立出る  
跡あと見て恂ひつくりり、捕手の人と一時に十手捕り繩打捨て遙はるかさがつて坐をし  
むる意儀いぎを正ただして由良助義平に向ひ手をつかへ、扱あつ驚おどき入たる御心  
底そこ、泥中でいぢゆうの蓮砂はすのまの中の金こがねとは貴公の御事、さもあらんさもそふづと、見込  
んで頼たのんだ一大事、此由良助は微塵聊ちひんちやう、た疑かひ申さねども、馴染なれな近付きで  
なきこの人、四十人餘の中にも天河屋の義平は生なれがらの町人、今  
にも捕とらられ詮議せんぎにあはゞ、いかゞあらん、何とかいん、殊ことに寵愛ちゆうあいの一子  
も有れば、子に迷まよふは親心おやこころと評議ひやうぎ區まう、案あん玄げんに胸むねも休やすまらず、所詮ところ一心の  
定めし所を見せ、古傍輩こぼうはいの者共へ安堵あんぶさせん爲ため、せま玄げんき事こととぞ存ぞんじな  
がら右の仕合せあ、僞忽せこつの段はまつびら、花は櫻木、人は武士と申せども、  
いつかな、武士も及ばぬ御所存、百万騎の強敵がうてきは防よせとを、左程に性根しやうこん

のすいらぬ物貴公の一心をかり受け我々が手本とし、敵師直を討つな  
 らば譬巖石の中に籠り、饑洞の内に隠る、共やはか仕損じ申すべき人  
 有る中にも人なしと申せ共、町家の中にも有れば有る物、一味徒黨の者  
 共の爲には、産土共氏神共尊奉らずんば御恩の冥加に盡果ませう、靜謐  
 の代には賢者も顯はれず、惜いかな悔しいかな、亡君御存生の折なら  
 ば一方の簷大將、一國の政道、恥預けやた逆惜からぬ御器量、是に並ぶ大  
 鷲文吾矢間重太郎を始免、小寺高松堀尾板倉片山等置し眼を開かする、  
 妙藥名醫の心魂有がたし、とすざつて三拜人も、不骨の段眞平と  
 疊に頭を摺付くる、夫れは御迷惑に手上らかれて下さりませ惣躰人  
 と馬にの、乗て見よ添て見よとせせば、恥馴染ない御旁は氣づかひに思  
 召も尤私元の軽い者、恥國の御用承はつても、經上つた此身代、判官様の  
 轡子承はつて俱に無念、何卒此耻辱雪やうはなにかど、りきんで見ても

豪龜のヒだんだ、及ばぬ事と存じた所へ、由良助様の頼頼、こそ心得たと  
 向ふ見ず、俱に力付ける斗り、情ないの町人の身の上、手一合でも御扶持  
 を戴ましたらば、此度の思し立、袖つまに取付いてなり共、供申、いづれ  
 も様へ息つぎの、茶水でも汲ませうに、夫れも叶はぬはよく、町人は  
 あさましい物、是を思へば、主の御恩刀の威光は有がたい物、それ故に  
 こそ、命捨らる、御羨しう存まする、猶も冥途で御奉公、秩序に義平め  
 が、志も、お執成とあつき詞に人とも思はず、涙催して奥齒、割斗りなり、  
 由良助取あへず、今晚鎌倉へ出立、本望遂るも百日とは過すまじ、承入れ  
 ば御内證迄、省給ふ由重くの志、追付け夫れも呼返させ申さん、御不自  
 由も今暫く、早に暇と立上る、申さば目出度旅立、以つれも様へも御酒  
 一ツ、いや夫れは、お扱祝ふて手打の蕎麥切、手打との吉相然らば、大驚矢  
 間御兩人の跡に残り、先き手組の八は、郷右衛門方彌を誘ひ、佐田の森

迄に先きへいざこなたへと亭主が案内、お辭儀は無禮と由良助二人を  
 「伴ひ入る月と、又出る月、と二つ輪の親と夫との中に立、おそのは一人小  
 洗燈くらき思ひも、子故の闇あやなき門を打た、き伊五よくと呼聲  
 が、寝耳にふつとあほうのかけ出、おれ呼たの誰じや、化生の者か迷ひの  
 者か、イヤそのじや爰明けてくれ、そういふても氣味が悪るい、必ばあとい  
 ふまいぞと云つ、門の戸押しひらき、おれゑさんかようぞんしたの、一  
 人あるきをするぞ、病犬が噛ぞへ、犬に成り共かまれて死だら、今の思  
 ひは有まいに、おりや去れたはいやい、どんな事にならんぞ、且那殿  
 はねてか、留主か、何の事じやぞやい、何の事やらわしもしらぬが、  
 宵のうちに猫が鼠を取つたかして、どつたくと大勢來たが、ちやつと  
 おれは蒲團かふつたればつい寐入た、今其わろ達ちと奥で、酒盛さゝん  
 ざやつていござんす、合點のゆかぬそふしてばんねたか、是はよ

うねて、いゝござんす、旦那殿とねたか、いゝ、われとねたか、いゝ、つゝる一人こるりど、なせ仰おほしてねさしてくれぬ、夫れでもわしにも旦那様にも、乳がな  
いといふて泣てはつかり、へ、可愛かわいやそふである、夫バつかりがほん  
の事とわつと泣出す門の口、空にえら、れる雨の足かはく袂もなかりけ  
る、いゝ伊五めどこにれると、呼立よびたてていづる主あるの義平、いゝ、愛にどかけ入  
る跡尻目しりめにかけてたわけめが、奥へいて給仕たまわひろげど、呵追しかりいやり門の  
戸をさすを押さへて、旦那殿、いふ事が有る爰明けて、いゝ、聞事もなし  
いふ事も内證ないしやう一ツの畜生ちくじやうめ、穢けがらはしいそこのこふ、いゝ、親おやと一所でない證據しやうこ  
それ見て疑うたがひ晴はれてたべど、戸の透すきよりも投げ込む一通捨つうひらひ取る間に付  
け込む女房おんな夫は書き物一と目見て、最前さいぜんやつた暇いとまの状これ戻してど  
ふするのじや、どふするとい聞へませぬ、親了竹おやたくみの悪工わるたくみは、常つねからよう知  
つての事、譬たとへどの様な事有逆、なせ隙状をくだんした持つて戻ると嫁ら

すど、思ひも寄ぬ拵嬉しい顔で油断させ澁紙袋の去状を、盗でわしは逃  
けて來ました。これ前はよし松可愛ないの、去つてあの子を繼母にかける  
氣かいの嗣欲など、すがり歎けば、其恨は逆ねぢ、此内をいなす折、言含  
たを何と聞た様子有つて其方に隙やるでなし、暫しの内親里へ歸つて  
居よ、舅了行は元九太夫か扶持人、心どけぬば子細いいはぬ、病氣の躰に  
もてなし、起臥も自由にすな、櫛も取るなど云付けやつたをなぜ忘れた、  
さんばら髪で居る者を、嫁にとろとい言ぬいやい、何の儻がよし松がか  
はいかろ、晝は一日あほうめがたましすかせせ夜に成ると噂様くくと  
尋ねる、か、は退つ付けもふ爰へど、たましてねさせとようねいらづ、呵  
てねさそど擲付け、こはい顔すりや聲上げずしく、泣いて罷るを見  
ては身ふしが碎てこたへらる物ぢやない是を思へば親の恩、子を持って  
しるといふ不孝の罰と我身をば悔んで夜と俱泣明かす夕べも三度抱

上げて、もふ連れていて、抱ていこと、門口迄出たれ共、一夜で堪納するでもなし、五十日隙さろやら、百日隔て罷こふあら、知らぬ事に馴染しては、跡の難義と五町三町、ゆふりあるいて擲付け、ねさしてはそつとこかし、我肌付くれば現にも、乳をさがしてしがみ付き、わづかな間の別れでさへ、戀こがる、物一生を引わけふとは思はね共、是非に及ばず暇の狀、了竹へ渡せまを、内證にて受け取ては、親の赦さぬ不義の科、心よからず持て歸れ、是迄の縁、約束事、死だと思へば事濟むと、切れ離よき男氣は常をしる程、猶悲しく、此家に居ると罷前が立たず、内へいぬると嫁らにやららと悲しむ者はわたし一人、是が別れにならふも知れぬ、よし松を罷こしてちよつと逢して下さんせ、それならぬ、今逢て今別る、其身、跡の思ひが猶不便な、わけて今宵は罷客も有、くどくどいはずと早くわいきやれ、夫れでもちよつとよし松に、扱未練な、跡の難義を思はずやとむ

りに引つ立て去り状も、俱に渡して門と先へ心強つよくも突出し、子こがかは  
 ゆくば了竹わたりへ詭言まご立て、春迄もかくまひ貰もらひ、思案しあんもあらん、それ叶  
 はずば是限りと門かどの戸しめて内に入、ッ夫れが叶ふ程なれば、此思ひは  
 ござんせぬ、つれないぞや我わが夫つま科かももない身を去るのみか、我子わがこに迄逢さ  
 ぬはあんまりむごごい胸欲むねな、顔見る迄はなんぼでも、いなぬ〜と門打  
 た、き、情なさけじや、慈悲ひじや、爰明けて寝顔成り共見せてたべ、コレ手を合せ拜まが  
 ます、むごい日ひいのだとどふとふし前後、不覺かくに泣けるが、恨うらむまい歎なげ  
 まい、なま中に顔見たらか、懺まごかど取付いて、離はなしもせまいし離れも成  
 るまい、今宵こんやぬれば、今宵の嫁入あす迄待たれぬわしが命、さらばで  
 ざるさらばやど、いふては戸口へ耳みみを寄せ、若しや我子が聲するか、顔で  
 も見せてくれるかと、窺うかがひ聞けど音もせず、ア、せひもなや是迄と思ひ切  
 てかけ出す向ふへ、目斗り出した大男道をふさいで引とらへ、是れを以

ふ間も情なやすらりと抜いて嶋田わけ根よりふつほと切取つて懐迄  
を引つさらへ、いづく共なく逃行し無法無息ぞ是非もなき、憎や腹、立  
や、何者かむとたらしう髪切つて、書いた物迄取つていんだ、櫛笄の盗人  
なと、いつそ殺えてくくと泣きけぶ、聲に驚き義平は思はずかけ出しが、  
「爰が男の魂の亂れ口よと喰まばり、ためらふ中に奥方も御亭主く、  
義平殿と立出る、由良助段々御深切の御馳走、礼の録倉方中越さん猶  
跡荷物にの儀、早飛脚ひを以つて礼頼れ、夜の明けぬ中ち早礼暇いといか様今暫  
し共中されぬ刻限、道中御堅勝けんで御吉左右さを御待ちまする、着致ちやくさば早  
速書翰そを以つて礼しらせ申そふ返すくも此度の礼世話、詞で礼禮は  
云、盡されませぬ、レ矢間大驚御亭主へ置き土産、いゆと文吾重太郎、扇を  
時の白臺しらだいと乗せて出たる、一包、是は貴公へ是は又御内寶うちたから礼その殿へ、左  
少ながらと指し出す、義平はむつと顔色かほのり、詞ことばでいはれぬ禮と有れ

の、イヤ、禮物受らふと存し、命がけの世話は中さぬ、町人と見侮り、小判  
 の耳で面はるのか、イヤ我々は娑婆の暇、貴殿は殘る此世の宿縁御臺か不  
 御前の儀も御頼申さん爲、寸志斗りと云殘し、表へ出れば猶むつと性  
 根魂を見ちがへたか、踏付た仕方あたいまくし、穢はしと包し進物蹴  
 飛ばせば、包はどけて内をばらり女房かけ寄、是はわしが櫛笄切られた  
 髪、く此一包の去狀、キ扱の最前切たのは、此由良助が大鷲文吾を裏  
 遣を廻らせ、根をふつと切らした心の、いかな親でも尼法師を嫁らそ  
 ふ共いふまいし、嫁に取る者は猶あるまい、其髪の延る間も凡百日、我々  
 本望透るも百日は過ぎ、討果せと後めで度祝言、其時に櫛笄其切髪  
 を添に入、笄鬘の三國一先つ夫れ迄は尼の乳母、一季半季の奉公人其肝  
 煎は大鷲文吾同矢間重太郎、此兩人が連中へ大事の洩ぬといふ請判、由  
 良助は冥途から仲人致さん義平殿、重々の志、禮中せ女房、日たえ

が爲に命の親イに禮に及ばず、返禮と申すも九牛が一毛、義平殿にも  
 町人ならずば、俱に出達どのに望幸いかな、兼て夜討と存れば、敵中へ入  
 込む時、貴殿の家名カの天河屋アを直に夜討の合詞、天アとかけなば河カとこた  
 へ、四十人餘の者共が、天よ、河よと申なら、貴公も夜討に於出も同前、義平  
 の義の字の義臣の義の字、平はたいらか、輒カく本望、早カに暇と、立出る、末世  
 に天アを山カといふ、由良助が孫吳カの術忠臣藏共いひはやす、婆娑カの言葉の  
 定免なきとかれ別れて、いで、ゆく

○第十一 夜討の段

柔能剛カをせいし弱能強カをせいするとは張良カに石公カが傳へ玄秘法カなり、  
 鹽谷判官高定の家臣、大星由良助是を守つて、既に一味の勇士四十餘騎  
 獵船カに取り乗つて、苦カふかくと稻村カが崎の油斷カを頼にて岸の岩根に  
 潛カ寄せて、先つ一番に打上る、大星由良助義金、二番目の原郷右衛門第

三番目は大星力彌跡に續て竹森喜多八片山源太、先手跡舟段に列を  
 亂さず立上る、奥山孫七須田五郎、着たる羽織の合以印、いろはにはへど  
 と立ならぶ勝田早見遠の森、音に聞へし片山源吾、大鷲源吾かけやの大  
 槌引さげく、吉田岡崎ちりぬるをわの手は小寺立川勘兵衛不破前原  
 深川彌次郎得たる半弓手狭で、上るハ川瀬忠太夫空に輝く大星瀬平よ  
 たれそつねならむうるの、奥村岡野小寺が嫡子、中村矢島牧平賀やまけ  
 ふこえて、朝霧の立並びたる薦野や菅野、千葉に村松村橋傳治、鹽田赤根  
 は長刀構へ、中にも磯川十文字、遠松杉野三村の次郎、木村は用意の繼梯  
 子、千崎彌五郎堀井の彌惣、同彌九郎遊所の酒にえひもせぬ、由良助が智  
 零にて八尺斗りの大竹に弦をかけてぞ持たりける、後陳ハ矢間重太郎、  
 遙跡ハ身を卑下し、出るハ寺岡平右衛門、假名實名袖印其數四十六人な  
 り鎖袴に黒羽織忠義の胸當、打捕ふげに忠臣のかな手本義心の手本義

平が家名、天と河ぞの合詞忘るな、兼ての云合、矢間千崎小寺の面々、悴力  
淵を始とし表門を入くく、郷右衛門と某は裏門を込入て相圖の笛を  
吹くならば時分はよまを乗込めよ、取べき首は只一ツと、由良助に下知  
せられ怒の眼一時に、館を遙に睨付け裏と表へ別れ行、斯とは知らず、高  
武藏守師直ハ、由良助が放埒に心もゆるむ油断酒、藝子遊女に舞諷はせ、  
薬師寺を上客にて身の程しらぬ大騒、果はさぞ寐の不行儀に前後もし  
らぬ寐入ばな非常を守る番人の折のみぞ残りけり、表裏一度に手筈を  
極め、矢間千崎、不敵の二人、表門に忍び寄り内の櫓子を窺へば、夜廻りと  
思しき拆遠音をさせば能き折と、例の嗜む繩梯子、高塀に打かけく雲  
井迄もどさゝかにの登り果せた塀の屋根、早拆の近付く音ひらりとれ  
りるを見付けし番人、スへ何者とかけ寄を取て引つふせ高手小手、よい案  
内と息をどめ繩先腰に引つかけて拆奪ひかつちかち、役所くを打廻

り窺ひ廻るぞ不敵なる、早裏門（さうら）に呼子の笛時分はよしと兩人は、拆合せ  
 て天河と、貫の木はづして大門をくわらりとひらけ、ば力彌を始め、杉野  
 木村三村の一黨（ひと）我れもくくと込み入つて、見れば一面雨戸（めい）のかた父  
 が敵（たて）し雪折れは、爰ぞと下知して丸竹に、弦（つる）をかけたを雨戸の鴨居（かき）敷居  
 にはさんで一時に、ひいふう三ツの柏子にてかけたる弦をてうと切れ  
 ば、鴨居はあがり敷居はさがり雨戸はづれて、ばたくくく、そりや乗込め  
 ど天河の聲ひ々かして乱れ入る、ス、夜討ちぞと松明挑燈裏門（たいまつ ちやうちん）よりも込  
 入て、一方は郷右衛門一方は由良助、床几（せうぎ）にかよつて下知をなす、小勢な  
 れとも寄せ手は今宵必死（ひつし）の勇者、秘術（ひじゆつ）を盡せば由良助餘（あま）の者に目なか  
 けど只師直を討ち取（と）と、郷右衛門諸共に八方に下知すれば、はやりその  
 若者共もみ立てく、切結ぶ、北隣（きたとなり）は仁木播磨守南隣（なみなり）りの石堂右馬（いすだまの）之丞、  
 兩隣より何事かど家の棟（むね）に武者を上げ挑燈星（ちやうちん）のごとくにて、く御屋

一三一  
敷騒動さうどうの聲太刀音矢叫きこび事さはがしく、狼藉者ろうじやくか盜賊とうぞくか、但し非常ひふじょうの沙汰さたなるか、承り届とどけよと、主人申付けられしと高らかに呼はつたり、由良助取ゆりすけあへず、是こゝは鹽治判官が家來の者共、主君の怨あだを報むかはん爲、四十餘人の者共が千變せんぺん万化ばんくわの戦ひ、かく申すは大星由良助原郷右衛門、尊氏御兄弟へた恨なし、元來もとより兩隣仁木石堂殿へ何の遺恨おんもいはねば、卒爾そつじ致さん様もなし、火の用心こゝろの堅かたく申付たれば、是以つて御用心に及はぬ事、只穩たん便びんに捨置かれよ、夫れ迎も隣家りんかの事聞捨ならず加勢あらば方なく、一、矢仕らんと高聲かうしやうに答こたたり、兩家の人々聞届け御神妙ごんめうく、我人主人持たる身は尤斯かゝこそ有べけれ、御用あらば承はらん挑燈引けど、一、時に靜返しづまひつて扣ひかへける、一時斗りの戦ひに寄せ手は僅わづか二三人、薄手うすてを負たる斗りにて敵の手負の數えれず、され共大將師直とたばしき者もなき所に、足輕あしけ寺岡平右衛門、館の内を飛廻り、部屋むらくは勿論もちろん上は天井下は簀子、井の

内迄鎗を入れてさせ共師直が行衛知れず、寐間とたばしき所を見れば、  
 夜着蒲團の温り、此寒夜にさめざるは逃けて間なまど覺へたり、表の方  
 が氣づかほしどかけ行を、ヤレ平右衛門待て〜と、矢間重太郎重行、師直  
 を宙に引立て、コレ何れも、柴部屋に隠れまを見付け出きて生け捕しど、  
 聞より大勢花に露いき〜勇で由良助、コレでかされた手柄〜、去なが  
 らうかつに殺すな、假にも天下の執事職、殺すにも禮義有りと、請取つて  
 上座にすへ、我と倍臣の身として、御館へふん込狼籍仕るも主君の怨を  
 報じたさ、慮外の程御赦し下され、御尋常に御首を給はるべしと相述べ  
 ば師直も遠のくせ者わろひれもせず、尤、覺悟は兼て、首取れど、油  
 断として抜打にはつまど切る引はづして腕捻上、ハッしほらしき御手向  
 ひ、ア、いづれも、日比の鬱憤此時と、由良助か初太刀にて四十餘人が聲と  
 に、浮木にあへる旨龜は是、三千年の優曇花の花を見たりや嬉しやど踊

上り飛上りかたみの刀で首かき落し、悦びいさんで舞も有、妻を捨、子に別れ  
老たる親を失ひうしなえも、此首一ツ見ん爲よ、今日けふのいにか成る吉日ぞと首を  
擲たつ喰くひ付きつ一同にわつと嬉し涙理り過こほて哀あはれなり、由良助の懐中くわいぢゆうか亡  
君の位牌ゐはいを出し床とこの間の卓しよくに乗せ奉り、師直が首血ち汐しほを清め手向け申、  
兜かぶとに入れて香を炷たきすさつて三拜はい九拜し、恐れながら、亡君尊靈そんれい蓮性れんせう院見  
利大居士りこくしへ申上奉る、去る御切腹の其折から跡吊あとぶらへと下されし九寸五  
分にて、師直が首かき落し、御位牌ゐはいに手向け奉る、草葉のかげにて御請取  
り下さるべしと涙と、俱ともに禮拜らいはいし、いざ〱御一人づ、御焼香しやうかう、先づ惣大  
將なれば御自分様より、イヤ拙者せつしやを先づさきへ、矢間重太郎殿御焼香なさ  
れ、イヤ夫れは存も寄よず、いづれもの手前と申、御最負ひいきは却かへつて迷惑めいわく、イヤ最負  
でござらぬ、四十人餘の衆中が師直が首取んと一身しんを抛なつ中なかつに貴殿一人、  
柴部屋を見付け出し生け捕になされたは、よく〱主君鹽冶尊靈えんれいの、

心に叶ひし矢間殿に羨しう存る、何といづれも、御尤に存まする、夫れは  
 何ん共、ハ切刻限が延ます然らば御免と一の焼香、二番目は由良殿いざ  
 御立とす、むれば、ハまた外に焼香の致し人有りそりや何者誰人ぞ、問  
 へば大星懷中が碁盤嶋の財布取出し是が忠臣二番目の焼香、早野勘平  
 がなれの果其身は不義の誤りから一味同心も叶はず、せめては石牌の  
 運中にと女房賣つて金調へ、其金故に鼻とは討れ金は戻され、詮ん方な  
 く腹切て相果し、其時の勘平が心無念に有ふ口惜からふ金戻したは  
 由良助が一生の誤り不便な最期を遂さしたと、片時忘れず肌放さず、今  
 宵夜討ちも財布と同道、平右衛門そちが爲に、妹聲焼香させよと投や  
 れば、ハはつと押戴、草葉のかげが、嘸有かたう存ましよ、冥加に餘  
 る仕合せと財布を香爐の上に着せ、二番の焼香、早野勘平重氏と、高らか  
 に呼はりし、聲も涙に震へすれば、列坐の人も残念の胸も張裂斗りなり

思ひがけなや人馬の音山谷（おんやま）にひゞく攻太鼓（せうたこ）開をどつとぞ上（あ）げにける、  
 由良助ちつ共騒（さむ）がず、扱（あ）は師直が一家の武士攻かけしと覺たり、罪（つみ）つゝ  
 りに何かせんと覺悟（かくご）の所へ、桃井若狭助（ももい）にければせにかけ付給（ま）ひ、  
 大星、今表門より攻かけた、師直が弟師安、此所で腹切つて、敵に恐れ  
 しと後代（こうだい）迄の譏（そしり）、塩冶殿の御菩提（ごぼだい）所光明寺へ立退（た）べしと、仰にはつと由  
 良助（ゆら）、いか様最期（さいご）を遂（と）る共亡（びやう）君の墓（はか）の前、仰に従ひ立退（た）れ申さん、御殿（ごでん）頼  
 上ると、いふ間もあらず、いづくに忍び居たりけん、薬師寺次郎鷺坂伴  
 内、此の大星遁（のが）さしと右往左往（うわさ）に討つてあゝる、力彌（りき）すかさず請（こ）な  
 じく、暫時（ざんじ）が内は討ち合しが、はづみを打てうつ太刀に、袈裟（けさ）にかけら  
 れ薬師寺最期、かゝす二の太刀足切られ尾（お）にもつがれず、鷺坂伴内其儘  
 息はたへにける、手柄（てがら）くと稱美（せうび）の詞、末世（まつ）末代（まつ）傳（つた）ふる義臣（ぎしん）是もひと  
 へに君が代の、久しき例竹（たけし）の葉（は）の榮（さか）を、爰（こゝ）に書殘（かきのこ）す

寬延元年辰八月十四日作者

竹田出雲  
三好松洛  
並木千柳

假名手本忠臣藏終

明治廿四年二月廿七日印刷  
明治廿四年三月二日出版

日本橋區通四丁目四番地

編輯兼  
發行者

內藤加我

日本橋區新和泉町一番地

印刷者  
瀧川三代太郎

日本橋區通四丁目四番地

發兌

金櫻堂

